

「Do for Smile@東日本」プロジェクト ボランティアセンター長補佐による総括

1. 学生ボランティア活動の記録

(1) 募金活動と計画立案

3月17日から19日まで、卒業式は中止となったものの、いろいろな事情で学内に集まった学生を対象として、募金活動を行った。ここで集まった募金は、有志学生からボランティアセンターにその活用が託された。これが、被災地復興支援活動のための原資の一部となったのである。

募金活動終了直後からボランティアセンターでは連日会議が開かれ、現地までの交通事情、ガソリンの供給体制、余震の状態、原発事故の影響を考慮しながら、先遣隊派遣の準備が進められた。4月4日、ボランティアセンター長と学生4名が仙台へと向かい、日本ユニセフ協会との協働プログラムをスタートさせた。そして、4月8日から10日まで、センター長補佐と2名のボランティアコーディネーター、1名の事務職員という4名のチームが、先遣隊として、東北学院大学のボランティアステーションを訪問するとともに、岩手県の被災地を視察することとなった。

4月8日、東北学院大学土樋キャンパスを訪問し、この震災を機に立ち上がったばかりのボランティアステーションを見学させていただき、今後の協働プログラムの可能性について議論させていただいた。翌日(4/9)、その日の朝に下りだけ開通した東北道を北上し盛岡インターチェンジまで到達。そこから現地のドライバーに運転を代行してもらいながら、宮古市、山田町、大槌町、釜石市と被災地を視察した。被災地は果てしない量の瓦礫に覆われているように見えた。この瓦礫の撤去作業は重機を使わなければ到底できるものではなく、大学生ボランティアがその作業を担うことはとても難しく、我々が担うことができる活動はあるのだろうかと思ふに暮れる思いであった。

4月9日夕方、岩手県立大学学生ボランティアセンターを訪問し、今後の協働プログラムの可能性について議論させていただいた。このとき、岩手県立大学のボランティアセンターを訪問していたユニセフ職員の方から、教育に関連する活動であればユニセフがバスを手配可能であるという話をいただいた。また、本学ボランティアコーディネーターが大槌町教育委員会に連絡を入れたところ、大槌町内にあった7つの小中学校のうち被災しなかったのは2校のみであり、4月下旬にはこの2校の校舎を利用して、学校を再開させたいと考えていることがわかった。この2校とは、吉里吉里小学校と吉里吉里中学校であり、この後明治学院大学の復興支援活動の拠点となった。

大学生が行う被災地復興支援活動は、無理をして瓦礫撤去や泥かきに従事するより、学校再開支援活動を行う方がふさわしいのではないかと判断し、4月10日東京に向かう移動中に、先遣隊の報告書をまとめ、学校再開支援活動を立案した。4月11日、大学執行部が集まる会議において、「日本ユニセフ協会との協働プログラム」「東北学院大学との協働プロ

ラム」、学校再開支援活動から着手する「岩手県立大学との協働プログラム」をスタートさせることが決定した。こうして、岩手県大槌町吉里吉里地区での復興支援活動は、学校再開支援活動を端緒として動き始めたのである。

(2) 学校再開支援活動

学内での事前準備の後、4月19日から5月2日まで、約5日間を1タームとして、3タームの学生（計32名）が岩手県大槌町吉里吉里で活動を行った。主な活動内容は、「吉里吉里地区の学校再開支援活動」「保育園にての支援物資仕分け、園児とのふれあい」「写真修復作業」であった。

このうち、学校再開支援活動の意義と実践についてのみ、ここでは述べておきたい。前述した通り、大槌町にあった7つの小中学校のうち、被災を免れたのは吉里吉里中学校と吉里吉里小学校だけであった。この2校に、他の小中学校の生徒が教室を借りる形で通い、教育活動を再開するという計画を教育委員会から教えていただき、また、地元紙である岩手日報からもその計画について知ることができた。

学校再開支援活動には、2つの効果が期待された。少子高齢化が進行し、深刻な人口減少により地域の社会的機能がマヒするおそれを目の前にしている農山漁村において、小中学校は必要不可欠な機関である。地域の運動会やお祭りなどの親睦機能・社会的統合機能の一翼を担い、パソコンやプロジェクターなどの情報機器の共有に寄与し、教職員とその子どもたちという住民を供給してくれるのが、小中学校なのである。農山漁村において、住民は小中学校の存続を熱望する。学校再開支援活動とは、そのような地域住民の熱い思いを支援するという効果が期待された。

それだけではない。学校再開支援活動は、学校再開に奔走する教職員の方々の「レスパイトケア」に繋がるのが期待されたのである。レスパイトケアとは、障害者、高齢者などをケアしている家族を癒すため、一時的にケアを代替して、リフレッシュを図ってもらう家族支援サービスをさす。学校再開にむけて奔走する教職員が行わなければならない仕事は多岐にわたり、大量にある。そのうち、専門職である教職員が行わなければならない仕事と、専門職ではなくても行うことができるにもかかわらず、人手が足りないために専門職が行っている仕事がある。被災地は、後者のために教職員が疲弊し、教育に向き合う時間が取れないという事態が生じかねない状況であった。そのような「誰かがやらなければならない、誰にでもできる仕事」を、学生ボランティアが一時的に代替することによって、教職員には本来専門職として行わなければならない仕事に専念してもらう。これが、我々が企画した学校再開支援活動である。これは専門職に向けた「レスパイトケア」のひとつとみなすことができるだろう。

したがって、学生ボランティアが行った実際の活動は、教室の清掃、教材の整理、支援物資の整理などであった。

(3) 支援の継続と中長期的支援の枠組みづくり

5月の連休中、被災地の多くは、全国各地から訪れるボランティアで溢れていた。しかしながら連休後は、被災地で活動するボランティアが急速に少なくなっていた。このボランティアの減少は容易に想像できていたため、我々は5月後半に、たとえ参加してくれる学生が少なかったとしても、吉里吉里を訪れ支援活動を継続するという約束を守り抜く意志があることを、姿勢をもって示す必要があると考えていたのである。そのうえで、吉里吉里地区でのキーパーソンとの信頼関係を構築しつつ、中長期的支援活動の計画を立案することが5月の活動の目的となったのである。

4月の活動から、活動の場を提供していただいた堤乳幼児保育園の副園長先生である芳賀カンナ先生の手を煩わせていた保育園に届いた支援物資の仕分け作業を、学生とともにお手伝いした。これも、カンナ先生のレスパイトケアに繋がることを期待しての活動であった。また、4月の学校再開とともに、「古中」と呼ばれる旧吉里吉里中学校体育館に移転した吉里吉里地区の避難所の運営スタッフのおひとりであった関谷晴夫さんと初めてお会いしたのも、この時であった。

中長期的な支援活動を実現するためには、支援活動を参加学生が自ら考え、立案し、実行に移すことができるような体制作りが必要であると考えていた。ボランティアコーディネーターなどの教職員が発案しなくても、学生自身が自ら考え、動けるようになる。そうすれば、たとえ教職員が引率しなくても、活動を継続することができるからである。6月以降の活動の企画は、この考えに基づいて、学生が主体になり、教職員はそのサポートをするという体制になっていった。

(4) 学生主体の活動を開始

6月の活動は、18日から20日の日程で行った。学生が企画した、足浴会、買い物支援ツアー、わんぱく子ども広場（子ども遊び）、写真修復作業、お茶っこサロン運営補助などが、その主な活動内容であった。7月の活動は、9日から10日の日程で行った。主な活動内容は、大槌中学校での支援物資配布援助、買い物支援ツアー、夏物衣料配布であり、6月同様、学生が主体になって計画した活動であった。夏季休暇中の活動は、学生のべ36名が参加して行われた。この夏季休暇中の活動を基にして、秋以降の活動は主として6種類の活動として展開された。「吉里吉里中学校での学習支援」「吉里吉里小学校でのわんぱく広場」「復活の薪プロジェクトへの支援」「吉里吉里地区での仮設住宅への生活サポート」「『吉里吉里語辞典』アーカイブ化活動」「吉里吉里の歴史アーカイブ化活動」である。

2. 復興支援活動と地域再生

(1) 対口支援

明治学院大学ボランティアセンターが行ってきた明学・大槌町吉里吉里復興支援活動は、対口支援活動であると、捉えることができる。「対口」とは中国語でペアを組むという意味であり、中国における四川大地震のときに大きな役割を果たしたために、「対口支援」という用語が人々に知ら

れるようになった。明治学院大学ボランティアセンターと大槌町吉里吉里がペアを組むことにより、大槌町吉里吉里の復興を支援するという同センターの活動は、対口支援そのものである。

同センターが対口支援活動を早期から円滑に開始できた要因を分析すると、以下の4点を挙げることができる。①寄付を原資とした独自財源を確保したこと、②学校再開支援活動という地域住民の思いに沿った活動から開始できたこと、③特定の個人が毎月最低1回は必ず現地に足を運び、個々の住民とのパーソナルな信頼関係を構築する努力を欠かさなかったこと、④支援活動を学生自らが立案し実行できる組織作りをしたこと、である。対口支援活動を展開することとなった大槌町吉里吉里地区と明治学院大学との間に、震災前から縁やゆかりがあったわけではない。対口支援活動を開始するためには、初対面の相手と信頼関係を構築することこそが、必要不可欠なのである。そのことを、活動当初から極めて明確に意識できていたことが、円滑に活動できた大きな要因であったと考えられる。

(2) 二元復興

夏季休暇中の活動から開始した「吉里吉里の歴史アーカイブ化活動」は、復興過程を記録する活動である。震災時の体験を聞かせていただくことは、傾聴ボランティア活動であり被災者の心のケアに繋がっている。同時に、これらの活動を通して得られた記録は、現在進行中の復興過程（事後復興）をモニタリングする際の資料になると同時に、事前復興にも役立てることができる。

事前復興とは、災害が発生した際のことを事前に想定し、被害を最小限にとどめるための都市計画やまちづくりを推進することであり、中林一樹らが提案している概念である。将来発生することが予想されている地震や津波などの被害に備えて、どのような都市計画やまちづくりを行えばよいか、それを検討する際、「吉里吉里の歴史アーカイブ化活動」から得られた記録は、貴重な資料となる。したがって、これらの記録は、事後復興と事前復興の二元復興のための、貴重な資料となると考えられる。

(3) 地域再生に向けて

このように、明治学院大学ボランティアセンターが行ってきた復興支援活動は、対口支援活動であり、二元復興のための資料を作成するのに必要な社会調査活動でもあったと捉えることができる。津波被害の被災地復興支援活動においては、堤防の高さをどの程度にするか、住宅地の嵩上げをどうするか、といった工学系の課題の多さが指摘され、それ以外の分野が貢献できる領域は少ないかのように、捉えられている。一般の方もそう捉えているし、専門家たちもまた、そのように考えている。しかしながら、工学系以外でも貢献できる分野は十分にある。そのことを、明治学院大学ボランティアセンターの復興支援活動は示している。

(浅川)

明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム

1. 復興支援活動の準備と枠組みづくり

3月11日の東日本大震災発生後、筆者らボランティアセンターの教職員は東北太平洋沿岸部への支援活動をどのように進めるか、その方法を探っていた。これまで経験したことのない大地震とそれに伴い発生した津波に対して、どのような支援が求められていて、自分たちはどんなことができるか、連日わたり、全国のNPOや行政、大学などの多くの関係機関と連絡をとりながら検討した。3月27日、これまで筆者と大学ボランティアセンターリソースセンターで共に活動していた、岩手県立大学社会福祉学部の山本克彦先生から岩手県の被災地に対する支援要請があった。山本先生は岩手県内沿岸部7ヵ所の災害ボランティアセンターの立ち上げに関わっており、自己完結型を前提して、岩手の被災地地域に学生を送ってほしいというものだった。センター内での協議を経て、4月8日よりセンター長補佐、職員、コーディネーター2名の計4名が先遣隊として、東北に向かった。8日は仙台の東北学院大学に、翌9日には岩手県沿岸部（宮古、山田、大槌、釜石）と岩手県立大学に訪問して、今後の活動について協議をした。釜石の災害ボランティアセンターでは、山本先生がアドバイザーを務める岩手県立大学学生ボランティアセンターの学生たちによる炊き出しのマッチング活動の様子を見学し、さらに学生の安全面への配慮、学生に期待される役割や活動上の留意点などについて、アドバイスをいただいた。その後盛岡の宿舎にて情報収集するなかで、大槌町の小中学校が4月25日に再開されるため、支援が求められていることが分かった。翌日に大槌町教育委員会に連絡を取り、4月20日から活動を行うこととなった。宮城・岩手における被災地で支援にあたる学生の募集は、すでに4月6日から開始していた。募集開始から5日間という短い期間であったが、すべての学部から36名の学生の応募があった。

4月16日に白金キャンパスにてオリエンテーションを実施した。第一部では、先遣隊が収集した現地の映像や情報を提示しながら、事前準備のポイント、想定されている活動内容、注意点などを伝えた。加えて、余震が頻発し、雪が舞うような寒さのなか、慣れない被災地で活動するにあたっては、メンバー間の協力体制づくりが不可欠である考え、チームビルディングをねらいとしたワークも行った。出発前の学生の心構え、姿勢として、筆者が特に学生に理解をしてもらいたいと考えたことは「人間は簡単には人を『救済』できない。その人自身が自分の力で立ち直ってゆかれるように、安心感を与え、感情を共にする人が傍らにすることが大切」（1995年5月、阪神淡路大震災後に投稿された心理学者河合隼雄氏による論説、『朝日新聞』より）ということであった。その記事では、地域のなかで徐々に話ができる関係を築く方法として、まずは避難所でのトイレ掃除から着手した臨床心理士による活動が事例として紹介されていた。学生のなかには「震災で困っている人を助けたい」と強く思って関わろうとする人がいるかもしれないが、気負いすぎると被災者に負担をかけてしまったり、ときには衝突にもつながってしまう場合がある。傷ついた人を支え、地域の再生を支援するためには、長い時間をかけて寄り添うことが必要であるという、支援者が気をつけるべき姿勢について伝えた。第二部では、社会学部の深谷先生にご

協力いただき、「傾聴」に関する講義と実習を行い、出発前の準備を整えた。

2. 小さな活動を継続的に

本センターは日頃から地域密着型のプログラムを展開している立場から、上述のように、顔の見える関係を基本とすること、時間をかけて地域のニーズに丁寧に応えながら、信頼関係を構築することを大切にしたい。そのためには、支援者と被災者という関係を越えた、対等な立場での交流という関係づくりが大切であると考えた。こうした考えから、引継ぎを綿密にしながら小規模のグループができるだけ途切れなく活動できるように体制を整えた。4月の緊急支援期は4月19日～5月2日の日程で支援活動を展開し、5泊6日で活動する10人程度のグループを3クール編成した。5月以降は、大学の授業に抵触しないように、週末を利用して、毎月吉里吉里に訪れ、刻々と変化する地域の状況に寄り添った支援活動ができるよう工夫をした。さらに、地域の方と話をする際には、センター教職員だけでなく、学生も直接ヒアリングに携わることにより、地域が置かれている状況やニーズについて、理解を深められるように、といった活動のプロセスを大切にしたい。

吉里吉里で活動をはじめた4月20日、教育委員会から依頼されたことは、始業式を迎える吉里吉里中学校の特別教室やベランダの掃除だった。津波襲来時は多くの住民の避難場所となり、その後は遺体安置所として使用されていた中学校であったが、始業式に向けて準備が進んでいた。私たちは津波が運んだ砂の積もったベランダや、津波で被害を受けた大槌中学校の生徒たちが使う教室の掃除を行った。被災地における初日の活動が、校舎内の清掃であり、学生にとっては、拍子抜けだったかもしれない。しかし、筆者は夜のミーティングにて、「まずは丁寧に掃除をすることが大切。ボランティアは黒子として存在を消すくらいでちょうどよい、知らないうちに掃除をしてくれた、ということではよいのではないかと話をした。

翌日21日は吉里吉里小学校での支援物資の整理と、新入生を迎える教室の清掃を依頼された。体育館には多くの住民の方が避難生活をされており、校庭には焚き木がたかかっている。漁師をする男性らが暖を取りながら、さまざまな協議をしていた。私たちは忙しく新学期準備をされる先生方や避難生活を送る方の邪魔にならないように、作業に取り組んだ。1年生の教室整備として、窓掃除をしていたところ、小学校の隣に住む女性から話しかけられた。その方は、今年で81歳になり、昭和8年の三陸沖津波も吉里吉里で経験したことがあると話されていた。「昔から吉里吉里は津波の被害にあってきて、その度に立ち直ってきたんですよ。でも、今度のはものすごく大きくて、たくさんの方が命を落としてしまった…。あなたたちは、わざわざ東京から来てくれたの。まあ、ありがたいねえ。」と涙を浮かべながらお話をしてくださった。この方は、老人クラブの会長であったため、後に紹介するお買い物の支援等の活動を実施する際に、仮設住宅で生活されている方への呼びかけに協力して下さったり、地域の様子を十分に理解していない私たちに丁寧にアドバイスを下さるなど、活動を進めるにあたって、多くの協力をさせていただくこととなった。

3. 学生からみた復興支援活動

活動を開始してから数日が経過すると、学生たちは地域の状況、避難生活を送る人の実態について、理解するようになっていった。震災から1ヵ月以上経過した4月22日の時点では、各避難所に物資は届いているものの、栄養のバランスが悪く、毎食パンのみであったり、同じような炊き出しメニューが続いていたり、ときには賞味期限が切れたパンを口にしないといけない状況にあった。地域にはボランティアと名乗って物を盗む等の悪質な出来事があったため、ボランティアに警戒心をもっている住民もいることなども知った。こうした状況を理解するに連れて、学生からは「聞き役に回って、地域の様子を理解していこう」、「指示を待つのではなく、自分たちができることを見つけて動いていこう」など、活動を円滑に進めていくための意見が、ミーティングで次々と出され、そうした緊張感と積極的な姿勢は学生全体に広がっていった。活動前後には、大槌から花巻までの移動のバスの中や宿舎にて、活発な意見交換が行われた。また、大学で行なうミーティング、引継ぎシートの活用など、継続的な活動のための引き継ぎについても工夫しながら進めるようになっていった。

4. 問題を発見し、対応の仕組みをつくる

5月19日に吉里吉里を訪問し支援物資の配布準備に携わった学生は、「物資として送られてくる衣類の半分以上は、古くなったり、汚れていたりする。新品のもの、『自分が着たい』と思えるようなものを、自分たちの手で届けたい」という思いから、衣類メーカーに協力を依頼して、避難所等に夏物衣料を配布する活動を企画した。6月には高齢者施設でのレスパイトケアとしての「足浴会」、安全な遊び場を失ってしまった子どもたちに対する遊び場づくり、仮設住宅で生活される方へのお買いもの支援、地域の側溝の手伝いなどに取り組んだ。夏には吉里吉里小学校の子どもたちを対象にした「わんぱく広場」を開催し、震災のために授業進行が遅れた中学生のための補習の手伝い、避難所閉鎖後の掃除の手伝い、吉里吉里の海と森を再生し、雇用創出もねらいとした『復活の薪プロジェクト』へのサポート、震災直後の地域の状況の聞き取りとアーカイブ化などに取り組んだ。こうした活動を基盤として、秋以降には、「わんぱく広場」、「中学校での学習支援」、「仮設住宅で生活される方への生活支援」、「吉里吉里語辞典の電子データ化と音声アーカイブ化」、「吉里吉里の復興の歩みのアーカイブ化」の6つのプロジェクトのもとで、活動を展開することとなった。(詳しくは20～25ページを参照)

ボランティアの役割とは、「行政をはじめとして、他の主体が対応しない問題を発見して対応していく、『対応の穴を埋めていく』機能と、関係するもの同士をつなぎながら、『対応の仕組みをつくっていく機能』がある」(菅磨、2008)と言われている。センターが行う活動は行政や学校、市場等が提供できていなかった対応の穴を埋める機能、住民同士をつなぎながら問題解決を進める機能を果たしたともいえる。

5. 学生の学び

センターでは報告会を開催して、津波によって被害を受けた地域の様子や学生が行う支援活動の様子を伝えている。発表のなかでは「そこには被災者という人はいませんでした。それぞれに名前があり、

人生がありました。私たちは、吉里吉里で出会った、あの人のため、あの人と共に活動しています」と力強く語っている。吉里吉里への強い思いが継続的な活動の動機づけとなり、毎月欠かさず吉里吉里を訪れている学生も少なくない。

活動が立ち上がった4月から継続的に関わっている学生をはじめ、これまでに多くの学生が活動に携わってきた。2012年1月の時点で15クルールの活動が展開され、合計75名の学生が、2月以降の春休み期の参加者を含めると、約100名の学生が吉里吉里での復興支援の活動に携わる予定である。

こうした活動を通して、学生たちはどんなこと感じ、何を学び取っているのかを理解するための手がかりとして、参加学生に任意でアンケートへの協力を依頼したところ、75名のうち、24名から回答が得られた。アンケートからは、コミュニティへの参加意識の向上、多様性に関する受容、大学での授業への取り組み方をはじめとして、多くの項目で、プラスの変化があった。具体的には「私をもっと地域社会に関わるにはどうしたらいいかについて、考えを深めることができた」(92%)、「自分の地域社会が抱えるニーズに気づくことにつながった」(71%)、「自分たちで学ぶだけでなく、異なる社会や文化に所属する人と学ぶことを心地よく感じる」(88%)、「自分の先入観や偏見に気づく機会となった」(88%)、「自分の専門科目を明確にするのに役立った」(63%)等の回答があった。また、日々の活動の振り返りシートからは、「人のために生きることが、自分の幸せになる生き方を学びました」、「目の前にある大きな困難を乗り越える支えになっているのは人の輪であり、そこから生まれる笑顔だと感じ、そういうことを広めていくことが私にできることだと思っています」というように、コミュニティのなかで、人々がつながり相互に支えあうような社会のあり方、生き方の重要性について、学んでいっているといえる。

6. 地域の再生に向けて

復興とは地域の再生である。筆者が吉里吉里人との関わるなかで印象深く思っていることは、どんなに津波の被害にあっても、吉里吉里を離れようとしない方々の地域への愛着である。東日本大震災による津波が到来したとき、吉里吉里の方たちは地域が一丸となり、困難に立ち向い、行政から支援を待たずして住民主体での救助活動を展開した。こうした姿に筆者も学生も動かれ、懸命に支援活動に取り組むこととなり、また自治を基本とした社会づくりの重要性を深く理解するようになっていった。現在は大槌町と明治学院大学が双方に補い合い、中長期に渡って協力体制を構築に向けた協議が進んでいる。本学による復興支援活動が、吉里吉里地域の復興の一助となること、また吉里吉里での復興支援活動を通して学んだ学生が将来社会で活躍してくれることを期待しながら、今後も支援活動を進めていきたい。

(市川)

参考文献：菅磨志保、『災害ボランティア論入門』、弘文堂、2008年

岩手県大槌町吉里吉里地区における緊急支援活動～4月から7月の活動報告

1. 概要

私たちは、4月20日より、大槌町教育委員会からの依頼を受け「緊急支援」を目的として、大槌町の小中学校の学校再開支援に携わった。継続的な活動を通して地域の方と信頼関係ができたことは、それ以降の活動の基盤になったのではないかと考えている。

2. 活動報告

1) 4月19日～5月2日

約5日間を1タームとして計3ターム、ボランティアセンター長補佐、課長、コーディネーター、社会学部や国際学部の先生方3名、学生32名が活動した。津波により被害を受けた小中学生が、津波で被害を受けなかった小学校や中学校に通うための準備作業を中心として行った。具体的には、体育館に教室を作ったり、被災した学校から机やいすを運び出す作業で、新生が入る教室と避難所周辺の清掃や、支援物資として届いた学用品の仕分けなども行った。明治学院大学の卒業生の紹介によりつながりができた保育園では、支援物資の衣類仕分けや園児との触れ合い、保育園再開後の初めての誕生日会で出し物を企画させていただくこともできた。継続的に活動する中で、現地とのつながりが徐々に構築され、最終グループの活動では、避難所の引越し作業のお手伝いを頼まれるまでにもなった。そのほか、大槌町を拠点として子ども支援や住民の生活再建に取り組んでいたNPO「パレスチナ子どものキャンペーン」の依頼を受けて、写真や賞状といった思い出の品についての泥などを慎重に取り除きながら、持ち主へと返却をするという復元作業も行った。

2) 5月21日～22日

ボランティアセンター長補佐とコーディネーター、学生3名が緊急支援の継続と中長期的な枠組みづくりを目的として活動した。保育園での支援物資配布の準備や、横浜にある大学、NPO、企業らが協働して復興支援活動に取り組むために立ち上げた「くらしまちづくりネットワーク横浜」とともに、大槌町の大ヶ口地区の集会所にてカレーライスやサラダの炊き出しを行った。

3) 6月18日～20日

ボランティアセンター長補佐とコーディネーター、学生15名が、レスパイトケアや仮設住宅で生活されている方などへの支援を行った。特別養護老人ホームでは、震災以後休む間もなく高齢者を支え続けている職員の方へのレスパイトケアとして、入居者の方を対象に足浴を行った。また、仮設住宅で生活されている方や自宅避難の方を対象に、釜石までの買い物ツアーを開催し、地域の方との交流を深める機会となった。さらに、震災後外遊びができない、両親が生活再建に追われている状況のなかで思い切り遊べていない子どもがいるということから、小学校にてサッカー、キックベースなどの遊びの場を設けた。この時に会った子ども達は、夏以降開催している「わんぱく広場」に必ず参加してくれている。このほかには続き写真復元作業や、支援物資配布を行い、足浴や杏仁豆腐の炊き出しなども行った。

4) 7月9日～10日

ボランティアセンター長補佐とコーディネーター、学生10名が活動した。9日は大槌町社会福祉協議会の依頼を受け、大槌中学校の跡地に合同慰霊祭のために設営された大きなドームにて、住民の方たちに支援物資を配布した。また6月に引き続き、買い物ツアーを開催したが、スーパーの出張販売が始まっていたため期待したほどには参加者が集まらなかった。10日には、私たち学生の発案で夏物衣料の配布を行った。これまで様々な支援物資の仕分けをしていて、全国から届けられた衣類は、古着のため汚れていて着ることができないものが多かったため、「新品の衣服を届けたい」という思いがあった。これを受けてボランティアセンター長が仲介してくださり、(株)ユニクロより夏物衣類を提供していただくことになった。どのような方に配布するのが良いかを学生たちで検討を重ねた結果、避難所で生活される方や、日ごろは勤務のために物資の配布に出向くことがかなわない保育園や特別養護老人ホームの職員の方に、衣類配布を行うこととなった。

3. 考察

緊急支援の経験を通して、私たちは、ひとつのことにしっかりと向き合うことや信頼関係の重要性を理解することができた。その具体的な例が、学校再開支援として新一年生の教室の床に大きく目立つように貼ってあるテープを剥がすという作業である。東日本大震災の発生後、「何かできることはないだろうか」という思いを持って集まった私たちは、「このテープ剥がしが、被災された方への支援として自分たちがやるべきことなのだろうか」という疑問にぶつかった。しかしそのテープは、避難所として使われていた教室の給水目印として貼られていたものであったこと、先生方は、テープがたくさん残ったままの教室に新一年生を迎えたくないが、そこまで手が回らないとあきらめかけていたことを知った。そこで私たちは、避難所で生活する同世代の人たちと力を合わせてテープ剥がしを行った。この活動を通して、小さなことでも一つひとつしっかりと向き合うことで、見えてくるものがあることに気づいた。

また、コーディネーターのサポートを受けながら、私たち学生もニーズを見つけていこうとするうちに、様々な出会いが生まれ、現地の方とのつながりができていった。活動を通して地域の方との信頼関係を築いていくことで、避難所の引越しや流された家から思い出の品を見つけ出すお手伝いなど、住民の方の生活と直結するような支援を頼まれるようになった。そして、人の温かさや人と人のつながりを実感することにもなった。当初は、「被災地のために」という思いで支援を始めたが、現地の方とお互いに顔の見える関係となったことで、次第に「あの人たちのために役に立ちたい」という思いに変わっていった。「被災者」とひとくくりにするのではなく、一人ひとり異なった思い、ニーズがあることを忘れてはならない。そして、緊急支援活動は短期支援であるが、その後、地域に寄り添った継続的な復興支援活動を続けていかなければ「あの人たちのため」にならないと強く感じた。

(社会学部社会福祉学科2年 麻生奈菜)

夏の吉里吉里復興支援活動の実施

夏休みという長期休暇を利用し、復興支援活動に打ち込むためのまとまった時間を確保することで、吉里吉里地区の住民の方との関係をより深いものにしたいという思いから、この活動を始めることとなった。学部生34名と大学院生の2名の合計36名が、4つのグループに分かれて、8月1日から9月5日の期間に吉里吉里地区を訪問して活動を行った。またこのほか、岩手県立大学との連携プログラムに9名の学生が携わった。活動内容は、吉里吉里中学校での学習支援や7月に協議して実施することが決まった地域の子どもたちの支援、仮設住宅でのお茶っ子サロンへの参加など、4月から継続的に活動を積み重ね、地域の方とお話するなかから見つけられたニーズや地域の課題に対して、吉里吉里地区の方とともに取り組むというものである。

まず、8月1日からの5日間は中学校での学習支援に取り組むこととなった。学生5名が吉里吉里中学校と大槌中学校にて中学校主催の補習授業のお手伝いをした。吉里吉里中学校での学習会は全学年が対象となっており、各学年10名から30名ほどの生徒が自主的に参加していた。学年ごとに学習の時間が定められていたため、生徒たちは部活動や家庭の用事などの時間の折り合いをつけながら学習会に出席していた。大槌中学校では、中学3年生のみの関わりとなった。2つの中学校とも、生徒たちは夏休みの課題や授業用ワークに取り組んでいたが、中学3年生であっても1年生の授業内容の理解が不十分な生徒もいたので基礎から復習することもあった。学習支援は初めての取り組みであったため試行錯誤での活動となった。生徒がどのような学習教材を持参してくるかわからず戸惑うこともあった。しかし、日を追うごとに中学生が自分自身のことを話してくれるようになり、お互いの距離が縮まっていくことを実感できた。学習支援は勉強を教えることだけではなく、特に3年生は予期しなかった環境で受験勉強に取り組まなければならない状況なので、勉強に対する不安などの相談に乗ることも重要だと思った。

次の8月9日からの5日間は学生7名で活動を行った。

主な活動内容は、吉里吉里小学校の児童を対象にした「わんぱく広場」の開催であった。そこでは、学生が遊びや科学実験を企画し吉里吉里小学校の生徒と交流した。プログラム内容は、校舎内でのうちわ作りやミサンガ作り、おりがみなどの創作活動とレクリエーションゲーム、校庭でのスポーツ大会やスイカ割りである。これは「震災の影響に



より、子どもたちが思い切り外で遊ぶことができない、夏休みに恒例となっているスイカ割り大会などの行事も実施できないが、なにかできないか」という、吉里吉里小学校PTA役員の意見を受けて学生が取り組むこととなった。この活動は、吉里吉里小学校佐藤良校長やPTA役員の全面的な協力のもと実施することができた。また、「子どもたちにできるだけいつも通りの夏休みを過ごしてほしい」という考えからはじまったラジオ体操にも毎朝全員で参加した。活動後、お二人からは感謝の言葉や手紙、企画

の改善点を頂いた。子どもが楽しそうに遊んでいたことで達成感があったが、それに満足せず頂いたアドバイスを踏まえ改善し、次の活動へ生かしたいと思う。

次の8月17日からの5日間は学生9名が活動した。住民たちによる地域再建の手助けとしてレスパイトケアを実施すること、さらに活動を通して新たなニーズを見つけるということを重ねて取り組んだ。震災直後は住民の避難場所になった高齢者施設にて、車椅子や窓の清掃、足浴などを行った。また、8月初旬に役割を終えた避難所の片づけ作業の手伝い、震災後に手入れが十分にできなかった神社や道路の草刈り、がれきの撤去なども行った。これらを通じて、秋以降の活動でも必要とされるニーズを発見し、目的を達成することができた。また、避難所として使用されていた吉祥寺の住職やボランティア活動をしている方、新聞記者の方と話す機会があった。3月11日の震災発生後の吉里吉里地区の様子や今後のボランティアのあり方など多岐に渡る話を伺うことができた。さらに、遠野まごころネットが主催したお茶会「お茶っこサロン」や吉里吉里地区にある神社で行われた郷土芸能の祭りに参加したことで、多くの住民の方と交流できた。他のグループと異なり幅広い活動に携ったので多くの住民の方と交流する場を持つことができた。こうした活動を通して、私たち学生と地域の方との信頼関係が深まってきていることを感じた。

最後の9月1日からの5日間は学生15名が活動した。これは夏期活動の締めくくりの活動であった。吉里吉里語辞典音声データ収集と「復活の薪」プロジェクトへの参加、わんぱく広場などを実施した。吉里吉里語辞典の音声データ収集では吉里吉里地区の住民の方に協力して頂き、吉里吉里語辞典の用例や項目を読み上げて頂いたものを録音しデータとして残す活動であった。しかし、活動をしていく内に吉里吉里語辞典の録音だけに留まらず、吉里吉里甚句や御祝唄、さらに戦前の生活風景や昔からの言い伝えについても聞くことができた。多くの方のご協力に、感謝の念でいっぱいである。また吉里吉里語辞典の音声データ収集とは別に復興の歩みを記録するためのインタビューも行い、震災直後の様子や今後の復興についての思いなどを伺った。毎日参加していた『復活の薪』プロジェクトの代表の方にインタビューを行い、プロジェクトについてより深く知ることができた。さらに8月に続いて「わんぱく広場」を開催して子どもたちと将来について共に考え、吉里吉里中学校の先生方と今後の学習支援について話し合いを行うなど、次の活動へ繋げる準備も行った。夏期の吉里吉里復興支援活動の締めくくりとなるよう心がけ、そして達成することができたと考えている。吉里吉里語辞典音声データ収集や吉里吉里地区の住民の方へのインタビューは、秋以降に主要な活動となる吉里吉里語の音声データアーカイブ化活動や復興の歩みのアーカイブ化活動の基盤となった。

以上のような活動を踏まえ、秋以降には「わんぱく広場」や「中学校での学習支援」、「仮設住宅入居者へのサポート」、「『復活の薪』プロジェクトへの支援」、「吉里吉里語辞典音声アーカイブ化」、「吉里吉里の復興の歩みのアーカイブ化」という6つのプロジェクトに取り組むことになった。その取り組み内容は次ページ以降に紹介したい。

(法学部法律学科1年 荒井美樹)

わんぱく広場

1. 活動に至る経緯

震災発生後の4月から現地でボランティア活動を進める中、子どもたちの遊びの場が減っているという現状を知った。私たちが子どもと繋がりを持ち、一緒に遊びながら体を動かすことで、震災によるストレスの軽減ができるのではないかと考えたことから、6月と7月には吉里吉里小学校の校庭で「遊びの広場」を開催した。夏休みには、「子どもたちにいつも通りの楽しい夏休みを送らせてあげたい」というPTA役員の思いに応える形で、「わんぱく広場」を開催した。夏期活動では約一週間子どもたちと一緒に過ごす時間があって、信頼関係が生まれてきた。10月以降には、一人一人の関係を濃いものにしたいと考え、引き続きわんぱく広場を開催することとなった。

2. ねらい

被災地となった吉里吉里地区の子どもたちに遊びの場を提供するというのが、この活動の目的である。私たちは、遊びを通して子どもたちと触れ合う中で、親や先生には普段見せないような表情や言動を引き出し、子どもと大人の懸け橋になること、交流の中で子どもたちの心の内を知り、少しでも心のケアに繋がられる活動を目指している。さらに、遊ぶ子どもたちの無邪気で元気な姿が、大人を癒し、生活に活力を与えてくれることも期待している。



3. 活動に関する考察

震災に関する報道やボランティアの数も少なくなってきた中、私たちは、学生の活動が少しでも復興の力になればと、長期間に渡る活動を吉里吉里地区で行なっていくことにした。さらに、震災でできなくなった行事も私たちがカバーしていけたらとも考えている。しかし、その目標を踏まえた秋以降の活動で失敗も経験した。私たちの思いばかりが前に出てしまい、子どもたちが企画の途中で帰宅し始めてしまったり、飽きてしまった子どものニーズに応えられない場面もあった。その経験を生かし、11月の活動では、子どもたちに何がしたいのかを事前に聞き、屋内で手先を使う遊びとして「静」の活動と、体を使う遊びである「動」の活動の両方を企画に入れるようにした。また、普段子どもたちだけではできないようなマカロニリースの作成やフリスビードッジなどの企画を考えた。12月は、私たちが吉里吉里地区に訪問できなかったため、小学校に特大サイズのクリスマスカードを送り、子どもたちに見てもらえるように飾ってもらった。現地にいけない時も、子どもとの関係性は継続させることが重要だと考えたからである。こうして活動を継続していく中で、より一層子どもたちとの関係が密になり、深い信頼関係が生まれるとも考えている。今後も「学生にしかできない子どもとの関わり方」を常に探りながら、子どもたちの成長や変化を見逃さず、より多くの笑顔を見ていきたいと思う。

(サブリーダー：社会学部社会福祉学科1年 市川由貴子)

中学校での学習支援

1. 活動の背景とねらい

2011年7月に大槌町教育委員会から、夏休み期間中の大槌中学校と吉里吉里中学校での学習支援の要請があり、この活動をするに至った。先生方は、震災以降休むことなく働き続けてられていて、心身の疲労が限界にある夏休みに、私たちは、震災の影響で授業進行が遅れたために開催された、補習授業のお手伝いをするようになった。具体的には、大槌中学校の3年生には3日間、吉里吉里中学校の1～3年生には5日間、先生方の補佐として学習支援を行った。9月には、コーディネーターと学生が先生方と協議を進め、受験を控えている吉里吉里中の3年生を対象に、継続的に活動していく事が決まった。これまで10月から12月まで計3回の活動を行い、高校受験直前の2月には5日間の学習支援を行う予定である。

この活動のねらいは3つある。1つ目は、勉強の楽しさを実感してもらうことである。生徒たちの自主学習を手伝い、勉強の楽しさやわかる喜びを実感してもらうことが、結果的に成績の向上に繋がると考えている。2つ目は、生徒に自主学習の習慣を持ってもらうことである。私たちは、中学生と年齢が近いことから親近感を持って交流し合えるという強みを生かし、学習面や精神面のアドバイスをすることで、やる気を引き出し、勉強をする習慣を身につけてもらう事を目指している。3つ目は、人と人との関係を築くことである。「ボランティアと被災者」という関係ではなく、「人と人」として密な関係を築きたいと考えている。震災によって吉里吉里地区の方々には、私たちには想像し尽くせないほどの辛く悲しい経験をされている。だからこそ、本来なかったはずのこの出会いを大切に、少しでも喜びを見出すことのお手伝いが出来れば幸いである。

2. 活動上の工夫、成果と課題

学習支援においては生徒たちとしっかり向き合いたいと考え、「学習カルテ」と1日の学習支援の様子を記入した「報告シート」を作成した。このシートを毎回中学校に届けることで、先生方と密な情報共有を行っている。また吉里吉里中学校と明治学院大学という学校間の交流も大切にしている。昨年9月に、現在の3年生が修学旅行で横浜スタジアムを訪れた際に、学生も会場にかけつけ、共に観戦した。次年度の3年生の修学旅行は、今年4月に予定されており、本学の白金キャンパスへの訪問が決定している。これからも学習支援以外の交流も行うことで、さらに良い関係になっていけると考えている。

また、活動に対して吉里吉里中学校副校長先生から、「震災の後処理などの対応に追われ、教員がまさに極限状態になっていたときにかけてくれて、助けられた。本当に感謝している」、「明学生が来るのを楽しみにしている子どもたちはたくさんいる」というお言葉をいただき、活動の成果を感じることができた。一方、課題は2つある。1つは、私たちがよりリーダーシップを発揮し、生徒たちの学習能力を向上させていくことである。もう1つは、メリハリをつけることである。勉強をする時は勉強する、休憩の時は休憩をする、これらを徹底し、より良い活動を目指したい。

(リーダー：国際学部国際学科1年 岩田裕貴)

仮設住宅入居者への支援

1. 活動の背景と目的

私たちが活動拠点としている大槌町の吉里吉里地区では、5月下旬から仮設住宅への入居が始まった。津波で家財道具を流されてしまった住民の方々には、様々な生活用品を買い求めたいというニーズがあった。仮設住宅周辺地域には、訪問販売が来ていたが本当に欲しいものは買えない、衣料の配布があっても着られないものが多いという現状を知った。そうした地域の現状に対応するために、6月と7月には、仮設住宅や在宅避難者の方々を対象に「お買い物支援」を実施した。8月には、仮設住宅で生活する方たちが抱える課題を理解するために『遠野まごころネット』が主催している「お茶っこサロン」へ参加した。

仮設住宅入居者に対する支援は、生活に密着した活動であり、私たちはこれまでに十分な経験がなかったため、活動を進める際にどのようなことをポイントとするべきか、どのような方法で進めればいいのか戸惑うことがあり、地域の方にご相談したり、学生間での話し合いが繰り返し持たれた。こうしたプロセスを経て私たちが考えた活動の目的は、仮設住宅で一人暮らしをされている方の孤立感情を緩和すること、被災状況の違いから震災後の生活に差異が生じた仮設住宅生活者と在宅避難者の交流を活性化することにより、コミュニティの再構築に向けて支援をしていきたいということである。

2. 取り組みの内容と活動を通して見えてきたこと

上記のような経緯を経て、まずは地域の実態を理解したいと考え、11月に仮設住宅にお住まいの方への聞き取りを行った。これまで学生たちとつながりがあった方たちに「現在の支援で満足されているか」、「地域の方が抱える課題に対して、私たちに何かできることはないか」ということを質問した。そこからは、各支援団体が行う「お茶っこサロンの参加者は固定されていて、新しく加わる人にとっては参加しづらい」、「個人の家でお茶飲みをしているから、外に出ていなくてもいい」というような声を聞くことができた。また、学生の活動に対しては、「学生なら気軽に話せる」とも言っていた。こうした聞き取りから見えてきたことは、お茶っこサロンとは異なる形の支援も求められているということである。そこで、1月の訪問時には住民の方々にご協力をしていただき、郷土料理コマコマ汁を教わる「講習会」を開催した。これは住民の方たちに役割を持って頂くことで、住民の方たちの力を引き出したいというねらいがあった。結果としては、仮設住宅にお住まいのすべての方々に支援を行えたわけではないが、今後講習会で作った料理を近所に配食する、子どもたちとともに講習会を行うなど、様々な可能性を見つけることができた。



今後の活動でも、住民の方々が力を発揮できるような場所を私たちが作ることによって、自立を促すような支援を行っていきたい。

(リーダー：社会学部社会福祉学科1年 宮本浩太郎)

「復活の薪プロジェクト」へのサポート

1. 取り組みの概要

「復活の薪プロジェクト」が始まったきっかけは、吉里吉里小学校で緊急支援活動を行っていた中で芳賀正彦さんという方と出会った事である。芳賀正彦さんは、震災翌日から吉里吉里地区の災害対策本部の副本部長をして、緊急車両を通すための国道の整備、ヘリポートの建設、ガソリンの確保等を行っていた方である。その後、津波により生じた瓦礫の廃材を加工して薪燃料『復活の薪』として販売、そしてその売上を被災者に還元するという『NPO 吉里吉里国』を設立させた。廃材を使った薪づくりは9月末に終えたものの、現在は吉里吉里地区にある手つかずの人工林整備での林業を通じて、被災者の雇用創出に取り組んでいる。

私たちが初めて芳賀正彦さんに出会ったのは7月であった。そのとき、正彦さんからは津波で無くなった方への思い、吉里吉里地区の海や山に対する思い、『NPO 吉里吉里国』の活動内容等を聞かせて頂いた。8月と9月の活動ではのべ40名を超える学生が『復活の薪』を作る作業として、くぎ抜きや薪割り等をお手伝いした。10月以降は、森林の間伐の作業で、薪の採寸、山道の整備、事務所移転等のお手伝いをした。また現地活動の他にも、『復活の薪』を使った商品開発や、芳賀正彦さんをお招きした講演会、インタビューの冊子化等を行っている。

2. ねらい

『NPO 吉里吉里国』の復興への歩みを支える事が活動目的である。現場に生きる人と出会い、吉里吉里人の声を聞く。そしてそこから学ぶだけではなく、それを通じて吉里吉里地区の現場で、または関東で活動して行きたいと思う。

3. 活動から得た成果と学び

復活の薪プロジェクトは、自分が今何をすべきかを考えて行動することが最も大切だと考えている。これまで次々と発生するニーズに合わせて山道を作ったり、時には海外から届いた手紙を訳し返事を書いたり、その時に必要とされる活動を行ってきた。また作業だけでなく正彦さんを始め、『NPO 吉里吉里国』のスタッフの皆さんから震災当時の様子や自分の生き方等、沢山のお話を聞かせて頂いたことが貴重な学びとなっている。吉里吉里地区で



聞かせていただいた言葉の数々を胸に留め、吉里吉里地区の復興への歩みを出来る限りお手伝いしたいと思っている。活動の一番の成果は吉里吉里地区の皆さんと仲良くなった事だと考えている。幾度となく「良く来たね」と言ってくれ、帰る時には「また来てね」と言ってくれる。そんな関係の中で私たちの支援活動は支えられ、また吉里吉里の方を支援に行けたら良いと思う。

(リーダー：国際学部国際学科1年 奥田愛基、サブリーダー：国際学部国際学科1年 生田みずき)

『吉里吉里語辞典』の電子データ化・音声データ化活動

『吉里吉里語辞典』とは、著者である関谷徳夫さんが約10年の歳月を経て作成した、吉里吉里地区の方言が集約されている本である。津波によりその多くが流されたが、「吉里吉里語を残したい」という著者の息子である関谷晴夫さんの思いから、その唯一残った辞典を頼りとして浅川達人先生を中心に2011年6月から電子データ化としての復刻作業が始まった。明治学院大学の学生、教職員、一般の方のご協力により、総数500ページ以上にのぼる吉里吉里語辞典の電子出力は、11月20日に無事終了した。その後、電子データ化から発展した音声データ化活動が始まった。これは、地域の方が辞典に記載されている項目や用例を読み上げ、それを録音し、音声データとして残すという活動である。

この活動の目的は主に2つある。1つ目は、前述したように吉里吉里語を残すことで、吉里吉里地区の文化を守るお手伝いをするることである。方言は、その地域の昔ながらの生活を大きく反映しており、方言が失われることは、その土地らしさや文化が無くなることを示している。現に、主な吉里吉里語の使い手であった漁にかかわる人が年々減ると共に、吉里吉里地区独特のなまりや方言を理解する人も少なくなった。その貴重な文化を守るお手伝いを『吉里吉里語辞典』音声データ化が担っている。また、活動の一環として吉里吉里甚句や御祝唄の演奏会を企画している。吉里吉里甚句とは、祭りや結婚式等、盛り上がる席に欠かさず演奏される吉里吉里地区独特の歌であり、また御祝唄は1年の漁の締めくくりの際に、漁師への労いとして歌われていた。今では、吉里吉里地区の子ども達にとって馴染みのない文



化となったが、始めの一步として触れ合う機会となれたら嬉しい。2つ目は、音声収集を通して、吉里吉里地区に住む多くの方々と出会うことである。音声収集は、原稿を読み上げて頂いた方から吉里吉里語を話す新たな方を紹介してもらい、という方式で進められている。2011年夏休みの活動から始まった音声データ化は、現在約130ページ分の録音を終え、計24名の方に読

み上げの協力をして頂いた。その出会いの数ほど思い出があり、録音後のお喋りは音声データ化活動の最大の楽しみとなっている。地域の方一人一人と向き合えるこの音声データ化は、吉里吉里地区で知合いを増やすことで、明学生による復興支援活動全体を円滑に実施させる役割を担っていると言える。

これまでの活動の中で、地元の方言といえども原稿を読み上げる際、「いざこうして読むとなると喋れなくなる」という抵抗を感じ、「本当の吉里吉里語じゃない」と普段の調子を掴めなくなることがあった。改善策として、ただ単に項目や用例を読み上げるだけでなく、会話を十分に盛り込むことで「普段の吉里吉里語」を録音することが出来た。そして、録音だけを目的とせず、会話にも多くの時間をもつことにより、それぞれの震災当時の経験や想いを聞ける貴重な活動となった。音声収集後はインターネット上でそのデータを公開する予定である。吉里吉里地区に住む方との更なる出会いを期待し、文化の継承に少しでも貢献していきたい。

(リーダー：国際学部国際学科1年 島澤朱)

吉里吉里の復興の歩みのアーカイブ化

1. 活動の経過と内容

私たちは、吉里吉里地区で津波による被害の痕跡を目の当たりにした。復興支援活動に関わっていくなかで、津波直後の様子、住民の方たちが力を合わせて支援活動を進めた状況、地域の方の復興への思いをたくさんお聞きする機会があった。この貴重なお話を記録に残したい、多くの方に吉里吉里地区の魅力を知ってもらいたい、住民の方が抱えている復興への思いや具体的な取り組みを伝えることで、吉里吉里地区に興味や関心を持ってもらいたいという思いからアーカイブ作業が始まった。

秋学期に入りアーカイブ作業のコンセプトづくり、具体的なページ割などについて、話し合いを重ねた。11月にはようやく冊子の完成イメージが固まり、現在は、学生が分担して執筆した原稿が編集者の手元に集まったところである。この冊子を発行するために、学生ボランティアを対象にした助成金を申請し、12月には「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」より、冊子作成の資金をいただけることになった。4月に発行される第一版では、夏の活動で行ったインタビューを元に、吉里吉里地区の人たちが、復興に向けてどのような思いで、どのように動いてきたのかに関する記事を書ける予定である。さらに郷土料理や吉里吉里語を紹介する記事、『復活の薪プロジェクト』の取り組みを紹介することで読者が自然との共生を学べるような内容なども盛り込みたい。私たちは、活動を通して学生としてたくさんのお話を学ばせていただいたことから、出来上がった冊子は私たちと同じ関東に住む大学生の手にとってもらいたいと考えている。また、将来的には吉里吉里地区の方にも読んで頂きたい。吉里吉里地区の子どもたちの教材として使って頂くことで、震災の教訓や地元文化を受け継いでいくお手伝いとなることを願っている。

2. 活動を通して見えてきたこと

インタビューを通して、現地の方から震災のお話を伺い、「つらい体験や思いを話す事で気持ちが楽になる」と言っていただいた。震災の体験は身近な人には話しづらく感じる方もいる。普段話せないことを私たちに話すことで、気持ちの整理がついたり、心のケアが少しでもできていたなら嬉しく思う。また、私たちは、インタビュー



原稿を書くことで自分たちの活動を振り返り、吉里吉里地区の震災後からの歩みについて整理することが出来た。そして、アーカイブ活動を通して学生間でお互いに知らなかった事についても共有することができ、さらに活動している学生個人の思いを知るきっかけになったのではないかと感じている。

(リーダー：社会学部社会学科2年 廣瀬えり)

明学・東北学院大学協働プログラム

被災地支援活動報告（宮城）：春期東北学院大学連携プロジェクト

この活動は、4月24日から28日までの5日間、東北学院大学の皆さんと連携しておこなった。明治学院大学からは、私を含む学生4名とコーディネーターの先生方3名の合計7名が参加した。

主な活動内容は以下の4つである。①海外の子どもたちから届いた手紙の和訳、河北新報社が出版した写真集「巨大津波が襲った 3・11大地震」のキャプションの英訳、②多賀城市にある避難所で子どもたちの遊び相手、③塩竈市の倉庫での復元作業の手伝い、④東北学院大学のボランティアステーション運営の手伝い、である。①以外の活動は、明治学院の学生が2名ずつに分かれ、それぞれ東北学院大学の学生と一緒に活動をおこなった。

①の活動での、シカゴの子どもたちから届いたメッセージからは、今回の震災に対する関心が伺えた。また、和訳されたメッセージは多賀城市内の避難所に届けられた。

②の活動では、避難所の一角に子どもたちの遊びスペースがあり、そこで活動した。午前中は、子どもたちが学校に行っていたため、遊びスペースの掃除や片づけをおこなった。子どもたちが帰ってきてからは、一緒にお絵描きや折り紙、鬼ごっこなどをして遊んだ。

そして③の活動では、米俵を保管している倉庫で、地震により崩れたひとつ25キロの米袋を手作業で積みなおしたり、袋が破けて散乱しているお米を片づける作業をおこなった。

最後に④の活動では、登録をしにきた学生に説明をしたりするボランティアステーションの運営スタッフの手伝いをおこなった。東北学院大学のボランティアステーションは登録制になっていて、ボランティアをしたい学生が登録をしにくる、というシステムになっていた。

生活面に関しては、食事は朝・昼は各自が購入したものを食べ、夕食はコミュニケーションをとるためにも全員一緒に食べるようにした。寝る場所は、東北学院大学の部屋をお借りした。また、1日の終わりにはミーティングをおこない、活動を通じて感じたこと、注意点などを確認しあうようにした。

今回の活動では、日々異なる活動をおこなったため、それぞれ感じるものが多少異なった。和訳・英訳のボランティアでは、瓦礫撤去や汚泥除去などの直接的なものだけでなく、このような間接的なボランティアの重要性も感じることができた。また、子どもと遊んだり、現地の方々と交流をするなかで、コミュニケーションをとるのが難しい場面もあり、改めて被災地でのボランティアの難しさというものも感じた。そして、日々変わるニーズをきちんと把握すること、どのボランティアも継続することが大事だということを強く実感した。現地での活動以外でも、仙台で行われる七夕祭りに送る折り鶴を本学の学生に広く呼び掛け、集めて送るという活動も行った。これからも東北学院大学の皆さんとのつながりを大切に、できることからやっっていこうと思う。

（国際学部国際学科3年 藤又茉央）

被災地支援活動報告（宮城）：夏期東北学院大学連携 気仙沼プロジェクト 1

【はじめに】

本プロジェクトは東北学院大学を中心に、本学をはじめ全国から10を超える大学が集う「大学間連携による災害ボランティアネットワーク」によって実施されたものであり、7月16日～9月22日まで、5泊6日を1クールとし、全10クールを連携大学で途切れなく支援活動を行ったものである。そのうち本学は第6～第10クールの活動に参加した。

【活動報告】

宮城県気仙沼市の第2唐桑体育館を拠点に、民家の瓦礫撤去・写真洗浄・リアスアーク美術館での漁業関係文化財の洗浄・アンカー（土嚢袋に砂利を詰めたもので定置網漁に使用される）作り・流失した本のリスト作成作業を行った。私が参加した第6クールでは、学生及び教職員が40人（本学生は6人）という大所帯であったため、活動するにあたり生活ルールをまず確認し環境を整えた。また学生主体のミーティングを毎晩行い、1日の活動報告や、安全に作業していくための注意点、活動を通して感じた想いなどを報告し合った。

リアスアーク美術館での作業は、気仙沼の漁業関連文化財を修復し、残すことで文化面からの地域社会の復興を目的としたものである。私は、古くから気仙沼で代々漁業に従事してきた歴史を持つ尾形家の、津波によって流出してしまった漁業関連の文化財をクリーニングする活動に参加した。これは、はけや楊子を使い、文化財を傷つけないように洗浄する繊細な作業であった。また被災された方たちと一緒に作業だったため話をする機会が多く、被災した当時の話を伺うことができた。しかし、他愛もない話もしながら、穏やかな雰囲気の中洗浄作業が行われた。民家の瓦礫撤去は、天理教・RQなど他のボランティア団体と合同で行った。木材を運びやすいように分断し、それをバケツリレー方式で運びトラックに詰め込む作業だった。民家は車が進入できない入込んだ立地であったため、手作業でしか撤去できない状況にあった。このような場所は、民家の方のみで作業しているようであったが、より多くの人手が必要であると感じた。その状況を手助けしていくのが、ボランティアの役割のひとつではないかと感じた。

【おわりに】

今回のボランティア活動は作業するだけでなく、人と人との関わりが非常に多く、それがボランティアをする上で大切なことであったと感じている。学生ができることは些細なことかもしれないが、作業をしたことで喜んでくれる人がいたことを実感できた。また本プロジェクトは途切れることなく継続的に行うことを目的としており、そのために学生たちは次のクールのために現地の状況や、活動において必要なもの、服装などの情報提供をした。それが質の高いボランティアに繋がり、現地の復興への手助けになったと感じている。

（経済学部国際経営学科4年 日詰由貴）

被災地支援活動報告（宮城）：夏期東北学院大学連携 気仙沼プロジェクト2

【第8クール概要】

- 日程：2011年9月2日（金）～9日（金）（2日及び8日は夜行バスにて車中泊）
- 活動地区：主に宮城県気仙沼市唐桑町地区
- 参加人数：明治学院大学 学生7名、引率2名（5日朝に帰京）

第8クール参加大学

桜美林大学、関西学院大学、西南学院大学、東北学院大学、立命館大学、
名古屋学院大学、明治学院大学、麗澤大学

【主な活動内容】

- ◇拾得物として届けられた写真の洗浄、アルバムのデータ化
- ◇鮎立地区の瓦礫撤去・砂浜清掃作業
- ◇浦地区の草刈り
- ◇一般民家の草刈り
- ◇定置網漁で使用するアンカー（土俵）作りの手伝い
- ◇リアス・アーク美術館の展示品修復作業の手伝い
- ◇地元小学校の子どもたちとの交流（サッカー、キックベースなど）
- ◇被災地現場の見学（気仙沼湾、陸前高田市など）
- ◇地元漁師や議員の方の話を聴く
- ◇現地活動を行っている FIWC（Friends International Work Camp）メンバーの話を聴く

【活動を振り返って】

参加メンバー全員が、支援活動を通して関わった多くの人から影響を受けたと感想を口にしていたのが印象的であった。それは現地の人との交流であったり、共に支援活動をした学内・学外の学生からであったり、現地での体験談を話してくれた人の言葉であったりする。様々なつながりの中で多くのことを学んだように感じられた。

第8クールは参加人数が全クール中で最も多く、宿泊場所であった体育館内は満杯状態であった。しかし、その人数の多さをパワーに変えて学校の枠を超えた結束を生み出したように思われる。最終日の最後の別れの場面では、涙を流して仲間との別れを惜しんだ者がいたほどである。全国にいる同世代の仲間たちと関わったことは、なにもものにも代え難い非常に貴重な経験だったのかもしれない。被災地支援活動に参加したことで得たこの夏休みでの経験を忘れずに、今後の被災地支援・復興に関わっていきたいと強く感じた。

（社会学部社会学科3年 梅津英雄）

被災地支援活動報告（宮城）：夏期東北学院大学連携 気仙沼プロジェクト3

1. はじめに

9月10日～15日までの第9クルの活動には、明治学院大学から9名の学生が参加した。現地では、写真洗浄・瓦礫撤去・リアスアーク美術館での古美術品修復・アンカー作り・生活班に分かれて活動した。時間の空きを見て、気仙沼周辺・陸前高田・南三陸町を視察した。

2. 活動を振り返って

3月11日に震災が起きてから、私はもどかしい気持ちでいっぱいだった。テレビの向こうから被災された方の思いや願いを知り、津波の様子・瓦礫の山・変わり果てた土地を見ても、どうすればいいかわからなかった。今回の活動で、気仙沼・陸前高田・南三陸町を視察し、自分の目で見て、空気を感じて、人に会うことで、ようやく震災の現実を受けとめることができた。

写真洗浄の作業では、現地スタッフの高井さんの「写真を綺麗にすることが復興につながらないかもしれない。でも少なからず写真を求めている人はいる。心の癒しになれば。」という言葉が忘れられない。写真一枚一枚からたくさんの思いを感じ、「この人たちが無事であってほしい。そしてまたこの写真を見て笑顔になってほしい。」そんなことを願いながら作業をした。

リアスアークでの作業は、ずっと前からここで作業していたと錯覚するくらい心地良い環境で活動させていただいた。しかし、活動を共にする方達は皆被災されていたため、被災体験を作業の合間に伺った時は戸惑った。どう声をかければいいのか、どこまで聞いていいのだろうかという学生同士で悩んだ。けれど、私達が想像していた以上に前を向き、とても明るく振舞ってくださった。「震災が起きて悪いことばかり起きているわけじゃないのよ。こうやって学生さんが気仙沼に来てくれて、あなたたちに出会えて嬉しいの。」と言われた時は目頭が熱くなった。何か手助けができればと思い参加したボランティアであったが、私自身これから頑張るための力をたくさんいただいた。また再会できることを楽しみにしている。

まだまだ復興への道のりは長い。私自身被災しているわけではないため、被災者の方と同じ目線で共感することはできない。しかし、気仙沼に行って今まで交わることがなかった現地の人・学生たちとの出会いがあり、大切な人たちがたくさんできた。この人たちのために支えになりたいと心から思った。この思いが私と東北を近づけてくれ、一回きりではない繋がりを作ることができた。一人ひとり小さい力かもしれないけれど、無力ではない。自分にできることを続けていけば、きっと何かが変わえられる。今回の活動でそうした思いに確信を持つことができた。5泊6日と短い期間だったが、私は絶対忘れないだろう。これからもずっとつながっていたい、そして復興まで支えていきたい。

(社会学部社会福祉学科4年 玉井千尋)

被災地支援活動報告(宮城): 秋期東北学院大学連携 気仙沼プロジェクト

●気仙沼プロジェクトボランティア活動後の動き

白金祭での活動

11/1 から 11/3 の白金祭において、ポスターの展示とパワーポイントを用いた活動報告会を開催。その際、『写真で伝える私たちの気仙沼』『市民が撮った気仙沼』の2冊の写真集を定価 300 円に 200 円上乗せし計 500 円で販売し、3 日間で 126 部を販売。この定価との差額分 200 円を義援金として寄付。

●現地に行かなくてもできる後方支援の模索

11/16 に明治学院の学生 3 名、社会学部教授で明治学院大学ボランティアセンター長補佐の浅川達人先生の計 4 名で上記の 2 冊「浜らいん」の写真集の編集者である熊谷大海さん(気仙沼在住)を訪問。

(1) 義援金寄付

義援金の総額(126 冊×200 円+寄付金=2 万 8534 円)を熊谷さんに手渡した。熊谷さんとの協議の結果、義援金は障害者施設であるマザーズ・ホームに寄付されることになり、後日熊谷さん本人からマザーズ・ホームの園長先生へと寄付された。

(2) 「東日本支援応援プラザ」気仙沼まで足を運ぶことなくできる復興支援活動の模索

“東日本復興応援プロジェクト from 銀座”への参加。これは東京都銀座で 2011 年 10 月 7 日からオープンしている“東日本復興応援プラザ”で行われている支援活動で、被災地の特産品販売による「銀座いきなり市場」、東北食材にこだわった軽食の販売による「銀座つながる食堂」、チャリティーイベントスペース「銀座ひろがれ舞台」などを含めた総称のことである。こちらに明学生が参加・企画できるのではないかというお話をいただいた。

(3) 「三陸唐桑再生プロジェクト」の広報活動

このプロジェクトの概要は、“応援会員”として一口 1 万円で応援をいただき、漁業資材の購入費等にあって、収穫ができるようになりしだい牡蠣・ワカメ・帆立などの各種海産物を詰め合わせて送るというものである。先日気仙沼を訪問し、宮城県漁業協同組合唐桑支所の方々にお会いした際にこちらのプロジェクトの概要をお話ししていただき、明治学院からも広報活動を行う計画を立てている。

(社会学部社会学科 2 年 上野貴大)

被災地支援活動（宮城）：春期・夏期活動センター報告

当センターでは、4月から東北学院大学災害ボランティアステーション（宮城県仙台市）の学生・教職員との合同プログラムに参加してきた。本学と同じく、キリスト教を教育理念とする東北学院大学は、被災大学でもありながら、震災直後の3月29日に「災害ボランティアステーション」を立ち上げ、学生と教職員が一丸となって、被災地の多様なニーズに対応しながら活動している。最初に訪問させていただいたのは、まだライフラインの復旧がままならぬ4月8日であったが、東北学院大学と本学の教職員らで、ミーティングを持たせていただいた。そして具体的な状況やニーズを伺うことができ、今後継続的な協力と連携関係を持たせていただけることになった。そこで4月22日から筆者が仙台入りし、その後4月25日(月)から4月28日(木)の4日間、本学の学生4名と教職員2名が合流して東北学院大学内で宿泊させていただきながら、東北学院の学生・教職員と本学の学生・教職員と合同ボランティア活動を行った。全面的なご協力のおかげで、直接ボランティアだけでなく、間接ボランティア、そしてボランティアを支えるボランティア・コーディネートの現場にも関わらせていただいた。そして今回の災害を様々な角度から知り、ボランティアを複眼的にとらえる機会となった。最終日には、両大学学生・教職員が集まって振り返りを行い、今後も連携していくことを確認した。また、本学学生スタッフの運営ノウハウも届けることができた。その後5月27日、東北学院大学災害ボランティアステーション主催「大学間連携による災害ボランティア活動 ワークショップ」に本学教員が参加させていただいた。そして、「一つの大学では対応が無理な問題も、大学間が互いの個性を尊重し合いできる支援を集約したとき、大きな力となりうるのではないか」という共通理解のもと、全国から10を超える大学が集う「大学間連携による災害ボランティアネットワーク」が発足し、気仙沼・唐桑地域における夏期プロジェクトが実施されることになった。5泊6日を1クールとし、全10クールを連携大学で途切れなく行っていくなか、本学では、第5～10クール（2011年8月20日～9月22日）に、学生43名、教職員12名の合計55名が参加した。派遣にあたり、改めてリスクマネジメントや説明会、各種手配等の段取りを何度も詰め直し、東北学院大学のコーディネーターの方とも調整と相談の連絡を重ねた。学生たちの関心も高く、説明会は溢れるほどの人が集まり、早々に定員が埋まった。春期と異なり、人数も多く初対面の参加者たちが夏期休暇中という状況の中で、長丁場をスムーズに引き継いでいくために、学生・教職員の連携システムの構築に注力した。具体的には、全参加者が加入するメーリングリストをたちあげ、現地の情報や振り返りの内容を報告するようにし、現地でも振り返りを行った。情報発信では、春期・夏期ともに、学生・センター教職員らがセンターHPやツイッター等を活用した。活動報告は東北学院大学災害ボランティアステーションにも送らせていただいたところ、HPにご紹介いただいた。この度、東北学院大学を始め、お世話になった被災地の方々から、逆に何度勇氣と希望を与えていただいたかわからない。心から感謝申し上げたい。今後も当センターでは、学内・学外で構築した連携・信頼関係を大切に育てていきながら、復興支援に継続的に関わらせていただく予定である。（李）

明学・日本ユニセフ協会協働プログラム

1. いち早く被災地へ

2011年3月11日、未曾有の大震災・津波に襲われた東日本に全国からボランティアが駆け付けた。明治学院からも多くの学生が支援に向かった。その意味で2011年はボランティアセンターにとっての歴史的な年となった。被災した東日本にはあらゆる人たちが入った。組織化された非営利組織（NPO）、非政府組織（NGO）、ビジネス手法の社会起業家、企業CSR（企業の社会的責任）、さらには、国連もいた。キーワードは「つながり」であり「絆」とされるが、支援する側から見ての際立った特徴は、そのアクター（参加者）の多様性にあるといえる。阪神・淡路大震災の時は違った。全国からリックひとつで多くのボランティアがかけつけ、善意の尊さを感じさせ「ボランティア元年」といわれたが、行政や企業の支援は組織化されておらず、混乱を呼んだ。それでは2011年の「3・11」は歴史上、何と命名されるのだろうか。「ネットワーク元年」という主張もあるし、ややむずかしく「マルチステークホルダー元年」という人もいる。寄付文化が存在しないとわれ続けてきた日本でもとてつもない額の義捐金、支援金が寄せられた。ネット上の寄付サイト、ネット募金も威力を発揮した。だから「寄付改革元年」と言う人もいる。どれも一理あるが、多くの人がひとつの場所にリソースを持ち寄り、連携して支援に動いたという意味で、「プラットフォーム元年」と呼ぶのが適切かもしれない。

2. 当初は現地入り禁止

震災直後、ボランティアセンターでは、余震と福島原発事故の影響に配慮し、学生の現地入りを禁止した。しかし、危険が去ったときに備え、学生を派遣する準備に入った。ボランティアセンターは阪神淡路大震災時のボランティア活動をきっかけにできた組織である。ここでしっかり使命を果たさなければ存在意義を問われる。先に動き出したのは実は学生であった。3月17日に予定されていた白金キャンパスでの卒業式（式は中止、学位授与式に切り替え）で募金をしたいと自主的に活動し、これが支援計画（後に「Do for Smile @ 東日本」プロジェクトと命名）立ち上げのきっかけを作ってくれた。

現地では被災者があふれ、宿舎不足や燃料不足でボランティア受け入れどころではない。いくつかのNGOや大学に当たってみたが、「来てもらっても寝るところもなければ、食べ物もない。高速道路も通れない」との反応だった。ボランティアセンター内でも、学生派遣には議論があった。福島原発事故による放射性物質の飛散を心配する声が強く、この面でも動きが取りにくかった。

一方で、何人かの明学生が支援で現地入りしたとの情報が入ってきた。そのスピードに正直驚いたが、「被災者とNPOをつないで支える合同プロジェクト」（つなプロ!）のメンバーとして活動しているようだった。設立メンバーは社会起業家系で、名前にある「つなぐ」は今回の支援を象徴している。富士通のクラウドが彼らの活動で大きな役割を果たした点も、被災者とNPOに加え、企業もつなげたと言えるだろう。

3. ユニセフの車でいち早く現地へ

3月下旬、状況に変化があった。まず福島原発の状況について専門家に会って情報収集したところ、「まだ困難な状況にあるのは間違いないが、一応落ち着いており、50キロ圏外である岩手、宮城での支援活動であれば問題はないだろう」とアドバイスもらった。そこへボラセンのセンター長にユニセフの人から電話が入り、思わぬ「つながり」ができることになる。「今東京に着いた。これから被災地に行く」という。国連は途上国支援のための組織であり、先進国である日本の支援は行わない。しかし、今回は、ユニセフを資金的に支援している日本ユニセフ協会をベースに動くらしい。学生ボランティアは必要で



はないかと尋ねると、これから探すところだという。直ちに明学の学生を送ることを申し出、了解もらった。問題は、現地への交通手段である。知り合いのNGOが被災地に定期的にヘリを飛ばしているのでもらうことも考えたが、リスクもある。そこへユニセフ側から「現地はガソリン不足で困っている。ディーゼル車を東京から仙台に運びたいが運転する人がいなくて困ってい

る」との話である。アフリカ仕様のランドクルーザー型大型車ではあったが、センター長が運転することになった。この時点で、座席数から学生は4人ということになった。出発は4月4日であった(写真参照)。

このころから、大学との連絡がつき始め、岩手県立大学、東北学院大学との協力を得たものを合わせ3プログラムを「Do for Smile @ 東日本」プロジェクトとして立ち上げ、被災地の人たちが一日も早く笑顔を取る戻せるための支援を始めることができた。

支援で留意したのは、当然のことながら学生の安全確保であった。内幕話になるが、学生の親が子どものボランティアには反対するのではないかと心配した。しかし、この心配は見事に裏切られた。多くの親が、行きたいという学生に「そうか。現地へボランティアに行けるなんてうらやましいな。親の分まで頑張ってきて」と気持ちよく送り出してくれたのである。だからこそ、けがはして欲しくなかった。なんとか無事に帰らせてあげたいと思った。ボランティアも通常の状態であれば、それほど心配は要らないが、何とんでも被災現場である。もしもの時の退避体制が不可欠だった。どういう時に支援活動を中止して安全のため退避するか、その退避基準を決めることにした。

「ボランティア活動に従事している学生の退避基準について」と題し、以下のいずれかの事態が発生した場合、ボランティア活動を中断し、安全な地域に退避することとする。

①活動地域で震度5以上の大きな揺れを伴う余震が連続して起こるなど危険と感ずる場合

- ②原発で新たな事故が発生、半径 50 キロを超えて放射性物質が飛散し、活動地域、あるいは通行地域で人体に影響があるほど通常の基準値を上回る場合、またその可能性が高い時
- ③活動地域で放射線物質による汚染が水、野菜、海産物に拡大した場合、またはその恐れがある場合
- ④政府の避難勧告がだされた場合
- ⑤その他、身近に危険がおよびそうな場合

このように慎重のうえにも慎重を期しての船出であった。

4. 明学・日本ユニセフ協会協働プログラム

「Do for Smile @ 東日本」プロジェクトは協働プログラムと連携プログラムがある。詳細は別に述べるが、おおよそ、表のような内容である。

プログラム名	場所	期間	支援内容
明学・ユニセフ協働	仙台、石巻、南三陸、気仙沼	4月4日～	避難所での子どもケア、入学式手伝い
明学・岩手県立大協働	大槌（吉里吉里地区）	4月19日～	写真洗い、学校再開準備、炊き出し
明学・東北学院大協働	仙台、塩釜、多賀城	4月22日～	地震写真集英訳、米国からの手紙和訳
明学・ガクボ連携	石巻、陸前高田、大船渡	4月19日～	がれき撤去、泥かき、清掃
明学・日本赤十字連携	宮城県内	5月12日～	がれき撤去、清掃
明学・生協連携	宮城県内	5月20日～	泥出し、清掃
明学・つなプロ連携	宮城県内	3月28日～	避難所ニーズ調査
明学・アジア学院連携	栃木・那須	5月～	建物被害支援

このうち、明学・日本ユニセフ協会協働プログラムは次のような活動である。当初は、仙台をベースに、石巻市内の避難所となっている石巻高校、青葉中学、湊小学校、釜小学校などで子どもといっしょに遊ぶという内容であった。ユニセフがデンマークから輸入したおもちゃ（箱の中の幼稚園）を使っの C F S（Child Friendly School= 子どもにやさしい空間）活動が中心だが、女川では入学式、始業式にも参加した。南三陸、気仙沼、名取でのニーズ調査ではユニセフ職員に同行して市役所を回っていっしょに調査した。ボランティアではなく、人道支援の最前線でのプロの仕事ぶりを間近に見て、学生も勉強になったようだ。さすがに国連機関だと感心したことがある。被災した子どもたちは当然トラウマを抱えている。どう接したらいいか学生にも戸惑いがあったが、ユニセフはちゃんと東京から専門家を招いて学生のためにプレーセラピー講習会を開いてくれた。

親しくなった子どもと分かれるときは学生もつらかったようだ。「明日、東京に帰るといった時の子ども

ものさびしそうな顔。泣いてしまった子もいた。つらいけど、そんなに必要としてくれていたのかと、複雑な気持ちだった」とある学生は振り返った。現地の東北学院大学、宮城学院女子大学の学生といっしょにボランティアをしたのも、思いがけない交流で、成果は大きかった。

5. 次々に新プログラムを開発

3つの協働プログラムは春休みに活発な活動を展開したが、春学期以降も依然旺盛だった。ボランテ



ィア学生の行き場がなくなるようなことがないように、5月に入り、外部団体との連携プログラムを立ち上げた。連携先は、信頼できる団体ということで、日本赤十字、日本財団学生ボランティアセンター（ガクボ）、生協、つなプロを選んだ。このプログラムで今も多くの学生が現地に赴いている。ガクボの第一回目の学生派遣の際、開かれた出陣式を見る機会があったが、会場には全国30大学の校旗が張り出され大変な活気だった。100人が2台のバスに分乗して

東京を出発したが、学生の関心の高さに圧倒される思いだった。（写真参照）

6. 貴重な「3・11」の体験

この歴史的な「3・11」に被災者と同じ地平に立てたことは、学生にとって一生の宝ものになるに違いない。現地の人たちのつらさ、力を合わせてそれを乗り越えようとする強さは、東京にいてはわからなかっただろう。私自身も、支援のことばかり考えていた時、避難所で、行方を捜す無数のビラに心が震えた。人々は、まだ、母を、妻を、わが子を探していた。気持ちはまだまだ復興に向ききれていなかった。お父さんが書いたのだろう。「〇〇（子どもの名前）、待ってろ！ パパが必ず助けに行くからな」というビラを見たときには、涙が止まらなかった。

現地にそのまま配られる「義捐金」とNGOの支援に使われる「支援金」の違いを知ったのも今回だし、義捐金配布までに時間がかかるからと、イオンが県に自由に使える「寄付金」を贈ったことにも感動した。有機野菜で知られる大地の会の会員が、「子どものことを考えると福島野菜は購入したくない」と慎重だった。そのことは決して責められるべきことではないだろう。それでも会員は「野菜が買えないのは申し訳ない。そのかわり寄付をしたい」と8000万円を集めたと聞き驚いた。それを現地に持っていったら、かなりの被害をこうむった人が「うちはいいから。被害のもっとひどい、あの人にあげて」とお金を受け取らなかったという話にも感動した。東北の人の中に古き良き日本人の面影を見る思いだった。気仙沼の唐桑地区ではカキの養殖をしながら、とくに循環型社会の実現に挑戦している「森

は海の恋人」の畠山さんにも出会えた。

被災地には、エネルギー問題、過疎、高齢化、子ども、就職難、農業、漁業など日本の抱える問題がすべてあった。そして、被災地を支える多くのアクターも存在した。国連、自治体、NGO、NPO、ボランティア団体、企業、そして多くの若者。これからの日本を支える学生が、現地で、この支え合いを見た意味は大きいと思う。

7. ボランティア大使として日本を変えてほしい、期待



最後になるが、ボランティア精神を大事にする明治学院大学では“Do for Others”（他者への貢献）を教育理念にしている。創設者のヘボン博士に由来するものだが、「Do for Smile @ 東日本」というプロジェクト名もそこからつけられた。学内で、この稀有の大震災で明治学院大学の理念を現地に届けてくれている学生の気持ちに応える方法はないか、と知恵を絞った。その結果、浮かび上がったのが、彼らを「明治学院ボランティア大

使」として認定する制度をつくることだった。

大使といえば大変なものである。ちょっと恐れ多い。しかし、何も立派な称号を付与しようという気持ちから浮かんだアイデアではない。大学がボランティアを推奨していること、だから、大学といっしょになってボランティアをやろうよというメッセージを学生に発信するのが目的である。その意味を汲み取り、学生生活を一層充実したものにしてほしいし、さらには、社会に巣立った時、日本社会をより良く変えていってくれるような、そんな社会人に育ててほしい。そんな期待を込めた制度である。学長から、ひとりひとりに、認定証を手渡してもらったが、彼らの、ちょっぴりテレたうれしそうな顔が忘れられない。



これも被災地からいただいたボランティアへの贈り物と考えている。

(原田)

明学・日本ユニセフ協会協働プログラム活動報告1

明学・日本ユニセフ協会協働プログラムは4月4日～5月2日まで、約1カ月の支援活動である。学生は3つのワーキンググループに分かれ、計12名の学生が参加した。活動は宮城県全域に及ぶ広範囲なものであり、日本ユニセフ協会の支援規模また支援スピードを目の当たりにし、多くのことを学ぶとともに、被災地のために今後も活動を続けていきたいと強く感じた。



震災発生から1カ月も満たない4月4日、われわれは緊張と不安の最中に今回の支援地域である宮城県へと向かった。現地では燃料不足の問題もあり、ディーゼル車が必要であった。そこで、原田ボランティアセンター長のもとに学生4名が集まり、日本ユニセフ協会が手配したディーゼル車を現地に届けること、これがわれわれの活動の始まりであった。道中、原田センター長を交え、今回の活動の注意点や現地情報共有を図り、一致団

結を誓った。ボランティア学生としての役割はあるか、と各々が自問自答を繰り返した。

今回の約1カ月に亘るプログラムでの役割は、主に3つ考えられていた。一つはC F Sへの参加である。主に石巻市内の避難所計10ヶ所を訪問し、子どもたちの心のケアまたストレスの緩和を促す活動である。日本ユニセフ協会がデンマークから取り寄せた「箱の中の幼稚園」、「レクリエーションキット」を使用して子どもたちに優しい空間をつくった。この活動は、われわれが大学生で、子どもたちと年齢も近いために、運営面も任されるなど、活動の大きな柱の1つであった。

二つめはBack to School ,Back to Kindergarten（学校・幼稚園再開支援）への参加である。日本ユニセフ協会は4月に入り学校再開に向けたサポート活動を展開、各地の小学校や中学校の始業式に合わせて文房具や学校用の備品などの供与を行っていた。われわれも物資を実際に各学校や子どもたちへ届けた。宮城県庁および各市町村レベルでの調整会議にもサポート役として参加し、国連ユニセフ職員や日本ユニセフ協会職員の方々のサポートに従事した。活動範囲や活動内容は多岐に渡り、総じてユニセフ職員の補佐官的な役割を担うこととなった。

三つめは宮城県内の大学生ボランティアのコーディネートである。宮城県内にある東北学院大学また宮城学院女子大学の大学生ボランティア約40名と連携体制を構築することが今後の復興へ向けて重要であると判断したため、日本ユニセフ協会側とのミーティング調整や被災地での活動を共に展開する環境を整えた。

今回の活動を通して、ボランティア活動は”気づきの連続”であると再認識した。自分たちに出来ることを気づき、ニーズを感じる。この連続を継続していくことが復興へ向けた第一歩であろう。

(法学部政治学科4年 江森隆浩)

明学・日本ユニセフ協会協働プログラム活動報告2

4月14日～22日の9日間、明治学院大学と日本ユニセフ協会との協働プログラムに第2陣として参加した。最初は、現地の大学生と共に避難所に行き、子どもたちと一緒に遊ぶ活動であった。決められた4つの避難所に行き、1時間子どもたちと自由に遊んだ。本来のびのびと遊んでいる子どもたちが避難所という狭い空間の中で自由に遊ぶこともできない。大人たちに囲まれて生活する中で子どもなりにいろいろなことを我慢しながら過ごしている。この活動は、そんな子どもたちが子どもらしく自由のびのびと遊べる時間を作りたいという思いから始まった。学生たちは日本セラピー協会と日本ユニセフ協会が主催する講座で、子どもたちとの接し方について学び活動に取り組んだ。活動終了後はみんな活動の反省・報告を行った。東京の学生はそれを活動報告書にまとめたり、次の日の活動に参加する学生や避難所の方と連絡を取り、準備を行った。

また、学生同士顔合わせをし、活動の報告をし合ったり、支援への思いなどを共有するため学生だけのミーティングを行った。また、今後の活動について話し合うための全体ミーティングを開いた。全体ミーティングでは、東京の学生を中心に会議を進めながら現地の学生と共に、被災地に元気を取り戻すために私たち学生ができることは何かを考えた。このミーティングには、ユニセフの方たちにも参加していただき、いろいろなアドバイスをもらった。ユニセフと学生がどう協働していくかなど、今後の方向性について話し合い共有を行った。



活動が休みの時は、ユニセフが行っている活動に参加させてもらった。1つ目はユニセフと生協の協働活動として行われた物資運搬である。小・中学校の授業再開に向けて、宮城県にあるいくつかの学校にトラックで物資を運ぶ作業である。トラックへ物資を積み込む作業や、名取市への運搬トラックと共に移動し、荷物を降ろす作業を手伝わせてもらった。2つ目は牡鹿半島でのニーズ調査である。ユニセフの方たちと一緒に牡鹿半島にある2つの小学校に行き、学校再開に向けて必要な物資を支援するためのニーズ調査を行ったり、避難所となっている福祉センターに行きニーズ調査を行った。

9日間でいろいろな活動に参加させてもらい、とても貴重な経験をすることができた。ユニセフという大きな組織と一緒に活動させていただくことで、考え方や活動への姿勢の違いに圧倒されながらも、良い刺激を与えられながら活動ができた。また、「支援する」ということの難しさや姿勢、本来の意味など、自分なりに改めて考えるきっかけにもなった。被災地では復興に向けて少しずつ前へ進み始めている。被災地にもっと素敵なお顔が溢れるように、継続的な支援をしていきたいと思う。

(社会学部社会福祉学科3年 山岸悠起子)

明学・日本ユニセフ協会協働プログラム活動報告3

日本ユニセフ協会との協働プログラムを継続する形で、ソニーマーケティングの提供によるデジタルカメラを用い、石巻市立湊小学校6年生24名を対象に「僕たち、私たちがカメラマン」企画を実施した。6月から7月にかけての約3週間、身の回りの好きなモノ・人を自由に撮影してもらい、その写真でオリジナルカレンダー制作。9月に銀座ソニービルにて、12月に湊小学校校舎内にて写真展を行った。



7月、オリジナルカレンダー作成を行った際、被災状況を多く撮影していると予想していたが、家族やペット、友達や好きなカードゲームなど、どれも個性豊かだった。ごく当たり前の身の回りを写し出しており、

私自身、日常の中での幸せというものを再認識することができた。写真を張り付け完成したカレンダーを嬉しそうに見せてくる子どもたちの笑顔を見て、私たちの活動にやりがいを感じる事ができた。

9月19日から25日の一週間、銀座ソニービルにて写真展を開催し、多くの来場者に被災地の子どもたちが見ている日常を感じてもらうことができた。「被災地が可哀想、気の毒というイメージが変わった」という言葉を来場者からいただいた。また、80名を超える来場者から子どもたちに向けたメッセージカードを書いていただいた。「頑張れ」などの言葉は少なく、多くが「ありがとう」と書かれていた。

12月18日には湊小学校校舎内にて写真展を開催した。銀座で開催した際に使用したパネルの他、メッセージカードを展示した。対象者24名のうち15名以上の子どもたちが家族とともに来場した。自分の撮影した写真がパネルとなり展示されている様子を見て、子どもたちは嬉しそうに家族に説明をしていた。子どもたちは「また写真を撮りたい」と話してくれた。東京からのメッセージカードを見て涙ぐむ親御さんもいて、「楽しませてくれて本当にありがとうね」という言葉をいただいた。

今回の企画は、対象者から内容まで、私たちが1から立案し実践するものであった。その中で対象者である子どもたちとその家族、学校の先生、地域の方々から感謝の言葉を多くいただきゴールを迎えられた。少しでも被災地のためになれたと感じると同時に、自信に繋がる機会となった。

被災地支援と聞くと瓦礫処理や泥かきなどを想像しがちであるが、メンタル面でのサポートや被災地と他地域を繋げる懸け橋となることも重要な支援だと今回感じた。この企画を含め私は5度、被災地に赴いたが時間の経過とともに支援のニーズは変化しており、今後はやはりメンタル面のサポートが重要だと感じる。今後とも被災地の子どもたちを対象に心の繋がりを大切にする支援を展開すると同時に、東日本大震災が風化されないためにも、被災地の今を東京の人々に伝えていく活動を展開していきたい。

(法学部政治学科2年 小林諭)

1 Day for Others 報告

新企画 「1 Day for Others - まちへ出よう」 報告

ボランティアセンターは、これまで社会に貢献し学びを深めるプログラムを推進し、多くの学生が地域を中心にその活動に携わった。今年度から新たにボランティア活動、NPO、社会起業家、企業による社会貢献活動について学ぶ「1 Day for Others - まちへ出よう」をスタートさせた。1日インターンを体験するイベントであり、この活動の趣旨、期待される成果等については「センター長挨拶」（詳細は本報告書3～4ページ参照）の中で紹介されているので、ここでは割愛させていただく。

当初、新入生向けプログラムとして2011年5月14日の開催を予定し、同年1月11日にはリーダー学生の結成式が行われ、順調にすべり出したが、「3.11の大震災」の影響により、実施日を秋学期の10月15日に延期した。そのため、若干ではあるが受け入れを承知してくださっていた団体の辞退があり、プログラム数は減少したが、それでもなお、23プログラムが開催され245名もの学生が参加し盛況を極めた。また、当イベントは原則的には「新入生企画」であるが、本年度に限り、全学年を対象として開催した。

当イベントは、新入生の参加を想定して横浜校舎のボランティアセンターが事務局となった。プログラム受け入れ企業等との交渉、リーダー学生や参加学生への連絡および相談、参加学生のエントリー方法の検討、広報活動、ならびにヘボン・チケットの企画等、実施当日まで試行錯誤を重ねながら多くの時間をこれに充てた。メールのやりとりも1,200件におよび、被災地支援活動に加えて多忙を極めた時期でもあった。

ここでいうリーダー学生について説明する。プログラム受け入れ先が決定してから、各プログラムには社会貢献活動に関心の高い2～3年生のリーダー学生を配置した。リーダー学生の役割は、実施当日までのスケジュール管理、受け入れ先と協議をしながらのプログラム内容の確定、当日の参加学生引率が主であった。実施当日は参加学生と共に活動にも取り組んだ。リーダー学生の存在が、本プログラムの成功を左右しているといっても過言ではなく、彼らの多くが、「リーダーとなって苦労した点はあるが、多くを学べて良かった」との感想を述べている。

企画段階で、インセンティブについても検討がなされた。その結果、参加者全員に福祉施設製造のパン、フェアトレード商品のコーヒー・紅茶、大木農園（地産地消）の野菜を使ったサラダなど極めて社会貢献性の高いものと交換できる「ヘボン・チケット」を配布することとなり、好評を得た。その原資はボランティアファンドを使用させていただいた。さらに、本学の教育理念を実践してくれた証として参加学生に「ボランティア大使認定書」が、ボランティア大使授与式（2011年11月21日開催）の中で、大西学長より手渡され、被災地支援活動に参加した学生と共に喜びを共有した。

今回のプログラムを通して、新企画として立ち上げた「1 Day for Others - まちへ出よう」は多くの成果を生み出した。一つに学生の成長である。リーダー学生は受け入れ先との交渉や調整等を通して、コミュニケーションの難しさを理解し、社会人を前に基本的なマナーに不安を持った者もいただろう。

気づきから多くを学ぶことで、社会との距離が少しだけ近づいたのではないだろうか。また、あるプログラム参加を契機に、環境開発への取り組みに興味が増して、次のステップを踏み出したとのうれしい報告がリーダー学生から寄せられた。加えて参加学生が、本ページ中段のアンケートの声にあるように、多くを吸収し、人とかかわりから学んだ事は大きい。二つ目に、これまで地域を中心としたボランティア活動へ関心を持っていた学生の出入りが多かったボランティアセンターに、NPO・NGOなど違う分野に関心をもつ学生が集まってきていることである。このセンターに多様な学生が集まり、知識や刺激を共有しながら、活動が広がることを期待したい。2012年度のプログラムに学生や教職員が関心を示して、より多くの学生が参加してくれることで、全学的なイベントに発展していくことを願っている。

最後に、このイベントを開催するにあたり、お忙しい中、本学の趣旨に賛同し受け入れてくださった企業および団体に深く感謝を申し上げたい。ならびに、プログラムにご協力いただいた先生方をはじめ、学生サポートセンター、教養教育センター、およびキャリアセンターにお礼を申し上げたい。

(中山)

開催日：2011年10月15日(土)

(一部プログラムは10月8日、12日、13日、14日、22日、26日、30日)

プログラム数：23

申込数：252名 リーダー学生45名

参加者：205名 リーダー学生40名 合計245名

参加学生の声(アンケートより一部抜粋)

・一番知りたかった、見たかった印刷行程を間近で見られて楽しかったです。本当にたった4色で色々な彩を出せるのだと分かった。社会貢献、特に環境配慮についても自分で考えていく部分でプラスになる話が聞けて、とても良かったです。(大川印刷 09LA)

・たくさんの知らない事、または座学だけでは分からないことを、実際に体感することができてとても良かった。寿町という所の人たちとそこに住む人たちを支える人たちと触れ合うことで出来てよかった。

(ことぶき福祉作業所 09LF)

・日常ではなかなか聞くことができないような話を聞くことができた。最初は知り合いが1人もいなかったけれど、IDayに参加したことで、今まで関わりのなかった人ともいろいろな話をすることができた。(A-WING インターナショナル 11LF)

・大好きなブランドである“THE BODY SHOP”を通じて、ボランティアに参加できて良かったです。いきいきプラザの方とお話している時に、感動して目がうるんでしまいました。(イオンフォレスト 09SG)

1 Day for Others プログラムリスト

	プログラム名	企業および団体名	実施日
1	なんとかなるさ×パン工房 Ange カレーパーティー	YMCA ワークサポートセンター 「パン工房」 Ange	15日
2	お寺を拠点に「共生」の文化をつくる	善了寺	15日
3	農園体験	大木農園	15日
4	さくらっこ	上倉田地域ケアプラザ	15日
5	1Day for Others with 柏尾川魅力づくりフォーラム	柏尾川魅力づくりフォーラム	雨天中止
6	Think globally! Act locally!	横浜ボランティアセンター学生スタッフ	15日
7	子どもと遊ぼう！	とっとの芽	8・15日
8	1 Day for Another View	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター	15日
9	HIV 啓発活動紹介 & ミニ講座	日本赤十字社神奈川県支部	8日
10	歩くことって簡単？	港区立御田小学校 PTA ヒマラヤスギの会	30日
11	見沼田んぼ福祉農園	見沼田んぼ福祉農園	15日
12	ノートテイク入門	明治学院大学学生サポートセンター	15日
13	寿町を知ろう！	横浜・ことぶき福祉作業所	14日
14	キャリア教育	NPO カタリバ	15日
15	チャレンジャー・Just Giving・寄付を集める人	ピースウインズ・ジャパン	15日
16	廃材を使って子ども向けのおもちゃを作ろう！	株式会社 オーク	12日
17	印刷を通じて社会貢献	株式会社 大川印刷	13日
18	途上国支援を考える	A-WING インターナショナル株式会社	15日
19	ビューティー・センター研修	株式会社資生堂	15日
20	ハンドマッサージで心をつなぐ ～高齢者とのケア交流～	株式会社インフォレスト	13日
21	先生になろう！	特定非営利活動法人キッズドア	15・22日
22	プラント建設の環境 CSR 最前線	千代田化工建設株式会社	26日
23	途上国水問題	ダノンウォーターズ オブジャパン株式会社	15日

主催：ボランティアセンター

共催：学生サポートセンター 教養教育センター キャリアセンター

1 Day for Others リーダー学生を終えて

[化粧と社会貢献 ～資生堂～]

資生堂のライフクオリティービューティーセンターにて、企業の本業を通じた社会貢献の1日体験を行った。ライフクオリティービューティーセンターでは、治療だけでは完全に消えない深い肌悩み部分を、化粧品でカバーする方法を紹介している。パーフェクトカバーは、資生堂が長年の化粧品研究の中で育ててきた肌の問題に的確に対応するファンデーション。青あざ、赤あざ、白斑、肌の凹凸、くすみを効果的にカバーできるよう5つのタイプが作られている。



また、メーキャップ講座の中で、実際の化粧品を使ってあざのカバー実習を行った。顔にペイントであざを書き、その上からファンデーションをつけることでどれだけ綺麗になるかを体験した。実際にやってみたところ、赤あざを綺麗に消すことができた。上の写真は学生が実習を行った時のものである。

その企業の特徴を生かした社会貢献の形があるということ、今回の活動から学んだ。このような活動が行われているということ、もっとたくさんの人に知ってもらいたい。また、資生堂へ事前訪問した際は1人で企業に入っていくことにとっても緊張した。1～4年生の参加者をリードしていくことに難しさを感じた。リーダー学生としての活動は初めての経験が多く苦勞したが、その分たくさんのことを学べた。この活動に参加して本当に良かったと思っている。（社会学部社会福祉学科2年 関川美果）

[子どもと遊ぼう！ ～とっとの芽～]

新入生を引率するリーダー学生として参加した。今回、子育て支援施設の一日を体験させてもらった。まず初めに、施設内の掃除をした。職員さんの指導の下、みんなが念入りに行った。掃除をしたことで、子どもたちに清潔な状態で遊んでもらえる環境づくりがいかに大切かが分かった。その後、プラレールのある広場に行き、子どもたちと楽しくコミュニケーションをとった。ままごとや魚釣り遊びが新鮮に感じられ、次から次へと新しいことを思いつく子どもの発想に驚いた。午後には、段ボールで子どもの乗り物を5人全員で作った。それぞれが役割を担い、一つのを完成させる達成感が得られた。終了後の参加者全員の顔は朝の時の表情と違い、楽しい一日だったと笑っていたのが今でも忘れられない。ボランティア活動を積極的に行えたことで、自分の成長を感じることができた。リーダーという役目を担い行動することの少ない学生が、自分の知らない一面を発見でき、新しいことへ挑戦できるきっかけとして、リーダー学生という役目は今後も重要であり、多くの人に経験してもらいたい。このプロジェクトを通して、キャンパスを飛び出し、自らが行動することで社会への関心や考えが深まったと思う。ボランティアを通じて学生と社会との輪がもっと広がればうれしい。（法学部政治学科2年 坂本絵里花）



国際機関実務体験プログラム ～参加学生の学びと活動の広がり

1. はじめに

今年度もボランティアセンターと公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）が共催となり「国際機関実務体験プログラム」を実施した。本プログラムはYOKEが横浜市内に集積する国際機関の活動を広く市民に周知する目的で市内の大学に協力を呼びかけたことにより始まり、プログラム全体のコーディネートをおこなうYOKE、受け入れ機関である国際機関、学生を派遣する大学（明治学院大学、横浜国立大学、横浜市立大学、フェリス学院大学）の3者が協働で運営している。本稿では学生を派遣する大学の立場から、ボランティアセンターの実施状況、プログラム参加によって得られた学生の学びと活動の広がり、学生とともに取り組んだプログラム評価について報告したい。2011年度の報告書であるが、春期プログラムが年度の変り目のため、2010年度（2011年2月～3月実施）の春期と2011年度（2011年8月～9月実施）夏期について記す。

2. 2011年春・夏プログラムの実施について

2011年春実施のプログラムには国連大学高等研究所（UNU-IAS）、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）、夏実施のプログラムにはJICA横浜、公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）の計4機関で各1名の学生が参加した。参加学生の募集は大学が行い、書類選考と個人面接を経て決定した。プログラムに携わるYOKE、国際機関、大学の役割とスケジュールは【表1】となっている。

3. 学生の取り組みの内容と学び

プログラムでは「国際交流や協力の実務体験を経験することにより、大学で習得した学問と現場での実践の融合及びその応用、国際性豊かな資質と世界的な問題を視野に入れて活動できる人材の育成」を目的としている。学生はあらかじめ国際機関が用意した活動を遂行することとなるが、プログラム全体として、オリエンテーション、実務体験、中間研修会、最終報告会が組み込まれており、学生たちはオリエンテーション時に設定した研修テーマと目標を意識しながら活動を進めていく。またそのプロセスにあたっては、プログラム全体を運営するYOKE、受け入れる国際機関、学生を送り出す大学がそれぞれの立場で支援している。例えば、夏期にJICA横浜で研修した学生は、オリエンテーション時のコーディネーターとの話し合いを経て、フィリピン人の移民をテーマにして掘り下げて研修に取り組むこととなった。活動先のJICAにおいて、学生はフィリピン人が海外に流出する理由にフィリピンの政策や家族のなかでの女性の役割が大きく関係していることなどの示唆を受けていた。

学生の学びの成果を測定する試みとして、今年からプログラム参加学生（4名）に対して、プログラム前後に、国際交流や理解やコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等、国際社会で貢献するための基礎的な能力が、どのように変容したと思うか5点法で自己評価してもらった。その結果、「国際交流・協力への理解」については、参加の前と後を比較すると、平均して1ポイントの変容であったが、テーマ設定能力、キャリア設計、持続力については、平均3ポイントの変化がみられた。また自由記述

欄には、オリエンテーションで研修テーマを入念に考えてから活動に取り組んだことにより、「テーマ設定力の向上につながった」(IUC 参加学生)、「JICA 横浜でフィリピンでの業務スタッフに直接指導を受ける機会があり、留学先で取り組む研究テーマを掘り下げる機会になった」(JICA 横浜)、「これまで漠然と共生に興味があったが、身近な地域での共生の基盤を作っていくことの重要性について理解を深められた」(YOKE) という、学びの深まりという効果があったことが分かった。

4. プログラムの社会的な影響についてのロジックモデルの作成に向けて

本プログラムは2004年より始まり、これまで他大学生を含めると100人を超える学生が参加する大規模なプログラムとして成長してきているが、プログラムの効果を測定する機会は限定されていた。今年「プログラム評価¹⁾」の考え方に基づいて、プログラムがもたらす直接的な効果、将来社会にもたらされる影響について考察するワークショップを実施することで、手がかりを得ようとした。ワークにおいて参加学生からは、例えば、IUCにて申込書の整理に関わることにより、「アメリカ人学生に対する日本理解には非常に幅があると認識するようになった」(IUC 参加学生)、「事前にテーマを掘り下げ、中間地点でのモニタリングを実施し、さらに報告会で周囲に発表するという一覧のプロセスにより、目的意識や達成感を持った学生を育成できていると思う」(JICA 参加学生)、というようにプログラムの社会的な意義について、学生から意見を収集することができた。現在 YOKE の提案により進められているプログラム修了学生を対象とした追跡調査結果と合わせて、プログラムが参加学生にもたらす効果、社会的な影響についての評価についても、さらに考察を深めていきたい。

5. 参加学生の事後活動の広がり

参加学生は、プログラムで得た経験や学び、ネットワークを生かして、さまざまな分野で活動に取り組んでいる。「国連大学高等研究所での研究のプロジェクトを手伝ってほしい」(UNU-IAS)、「横浜市国際学生会館(留学生会館)にて、日本人学生としてチューターをお願いしたい」(YOKE)、「フィリピンでの調査をサポートしてくれる JICA 職員を紹介しよう」(JICA 横浜) など、学生の活動は広がっている。

6. 最後に

今年は昨年3月の東日本大震災の影響により2010年度、春期プログラムについては予定していた研修を最後まで遂行できないままにプログラムを終了せざると得なかったり、夏期プログラムは大学の新学期開始の遅れにより、新学期がはじまってまもなく募集を開催することになったりなど、震災の影響を大きく受けてのプログラム実施となった。震災時2人の研修学生はそれぞれ研修先にいたが、幸いに怪我などをすることがなかった。IUCで研修した学生は、地震に慣れないアメリカ人と一緒に買い出しに行ったり、不安を軽減するためにゲームをするなど、落ち着いてアメリカ人学生のサポートにあたっていたと聞いている。

夏期プログラムについては、プログラムに参加する4大学のなかで唯一新学期開始が5月になったため、YOKEや大学の担当者の皆さまには、多大なご配慮をいただいた。関係の皆さまのご厚意のおかげで、

例年と異なる状況のなかにあっても、円滑かつ充実したプログラム遂行ができたことにこの場をお借りして深くお礼を申し上げたい。

【表1】「国際機関実務体験プログラム」スケジュールと役割分担

プログラム説明会[大学] 春期:2010年11月 夏期:2011年5月	・YOKEによるプログラム概要の説明 ・大学VCから、応募方法の説明とプログラム修了学生から体験談の紹介
学生の選考[大学]	・書類審査及び面接
大学オリエンテーション[大学] 春期:2010年12月、2011年1月 夏期:2011年6月、7月	・学生の研修テーマ設定の準備 ★ ・国際機関の活動に関する事前学習 ★ ・研修上の留意点の伝達
学生と国際機関の面談[国際機関] 春期:2010年12月 夏期:2011年7月	・国際機関の概要と研修内容の説明 ・研修スケジュール(100時間)の作成
YOKEオリエンテーション[YOKE] 春期:2011年1月 夏期:2011年7月	・4大学合同の学生顔合わせ ・プログラムの趣旨及びスケジュール、心構えと注意事項の伝達 ・研修テーマを学生が発表 ・合意文書と研修スケジュール(100時間)の提出
国際機関での実務体験[国際機関] 春期:2011年2月～3月 夏期:2011年8月～9月	[活動先] 春期:国連大学高等研究所、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター 夏期:国連食糧農業機関、(財)横浜市国際交流協会
中間研修会[YOKE、国際機関、大学] 春期:2011年2月 夏期:2011年8月	・国際機関、学生、大学担当者による3者面談 ・YOKEと大学担当者の合同ミーティング ・国際機関見学(参加学生)
最終報告会[YOKE、国際機関、大学] 春期:2011年3月 夏期:2011年9月	・学生による研修成果のプレゼンテーション ・YOKEと大学の合同ミーティング
報告書[YOKE] 春期:2011年3月 夏期:2011年9月	・プログラム参加から得た学びと今後の課題をまとめる (YOKE、国際機関、大学に提出)
プログラム総括会[大学] 春期:2011年3月 夏期:2011年9月	・活動の成果と課題に関する振り返りと考察 ★ ・プログラム参加による影響の広がりを考察する(ワークショップ形式) ★

★印は本ボランティアセンターが独自に実施しているもの。

(市川)

i プログラム評価とはP. Rossiにより理論化されたものである。今回のワークショップは、ロジックモデル作成の準備段階と位置づけ、プログラムの実施により得られる直接的な効果や影響についての仮設生成作業のひとつとしてワークショップ形式でブレインストーミングを行った。

日米 NPO ボランティア体験学習プログラムについて

1. はじめに

本プログラムは 2005 年度からスタートし、2006 年度以降はサービスマーケティングの手法を取り入れた、体験学習プログラムとして工夫と改良を続けてきた（詳細はボランティアセンター 2005 年度、2006 年度、2007 年度、2008 年度、2009 年度、2010 年度報告書を参照）。今年度で 6 回目の実施となったが、この期間、学部の垣根を超えて多くの学生たち（主に 1、2 年生）が、プログラムの参加を通して様々な体験を共有し、社会について思考し、社会的活動に関わるための基礎力の向上を目指して、奮闘してきた。

本プログラムは「貧困」「マイノリティ」をテーマとしており、中でも、路上生活者と彼らを取り巻く社会の現状に注目し、彼らを支援する日米の NPO 法人の協力を得て構成している。具体的には、あらかじめ指定文献を読み、執筆要項にしたがってレポートを書くなどの事前学習を経て、各団体のフィールドへボランティア体験に参加させていただいている。フードバンクの活動を日本に初めて紹介したセカンドハーベスト・ジャパンでは、日本人だけではなく多くの在日外国人の方々とも一緒に、上野公園で路上生活者の方々に食事を配る炊き出しボランティアに参加する。また、理事長のチャールズ・E・マクジルトン氏の講演も毎年企画している。その後、アメリカ NPO 法人日本太平洋資料ネットワーク (JPRN) の協力のもと、参加学生はボランティア活動が盛んな地域として知られているアメリカ西海岸のサンフランシスコ、バークレーで共同生活を送りながら、アメリカのフードバンクや食事を無料で提供するスープキッチンでのボランティア活動に参加する。またサンフランシスコ州立大学で Ethnic Studies のクラスに参加したり、学習的フィールドトリップに参加したり、他にも英会話レッスン、毎日の振り返りや評価ミーティングも行う。帰国後は、特定非営利活動法人ビッグイシュー基金の協力のもと、団体スタッフと販売者の方からレクチャーを受けたり、彼らと一緒に雑誌「BIG ISSUE」を販売する「道端留学」に参加する。そして、このような一連の体験と、毎回繰り返されるディスカッションや、振り返りを通じたインプット・アウトプットの過程において得た学びを、参加学生たちはプログラムの集大成として報告会と報告書という形にまとめて、発信する。

以上のように、本プログラムは日米のフィールドにおいてバランスよく学べることを目指して構成している。そして、参加学生たちが貧困やマイノリティを中心に、社会問題について深く考えるとともに、思考力、行動力、発信力、コミュニケーション力、語学力などの、社会活動に参加するにあたって必要な基礎的な総合力を身につけることを目指している。そうして、プログラム修了後に社会の様々な現場で活躍することを期待している。多くの修了生たちは、積極的にボランティア活動に参加したり、自ら社会貢献活動を立ち上げたり、プログラムで得た学びを就職や進学などの進路に反映させたりなど、様々な形で自分の道を切り開いている。

2. 2010 年度プログラムを振り返って

前述のとおり、本プログラムは、2005年度からはじまり、毎年試行錯誤を重ねながら実施してきた。そして、2011年度からは、本学教養教育センター提供科目として単位化されることになり、2011年秋から新たなスタートを切ることになった。したがって、2010年度プログラムは単位化前の、最後の実施となった。このように、プログラムにとって大きな節目を迎えた今年、東日本大震災という大きな出来事が起きた。日本の大地が揺れたと同時に、人々も大きく揺さぶられた。そして多くの人々が、今までの、様々な「当たり前」が「当たり前」でなくなってしまう、数多くの試練に襲われた。本プログラムは毎年秋学期（後期）からはじまり、年度をまたいで翌年度の春学期（前期）に修了する流れとなっており、地震が発生したのは、2月～3月のアメリカにおけるプログラムと、帰国後の道端留学が無事に終了し、プログラムの仕上げとなる、報告会の準備が始まるタイミングだった。東日本大震災という甚大で複合的な災禍は、多くの目に見える傷跡を残したと同時に、残念ながら「貧困」と「マイノリティ」を、一層複雑で見えにくい、深刻なテーマへと導いていった。しかしそれは半面、大震災が、社会に対して、今こそ多様性とリベラルな思考のコンテクストから出発してオルタナティブな思考を生み出すことを、大きな揺さぶりをもって求めたと捉えることもできるだろう。換言するならば、「貧困」と「マイノリティ」という現象を対象的ではなく、関係的に捉え、その文脈を捉えなおす作業——つまり、この社会的要求は、学問を追求する大学という場にこそ、与えられたミッションであることが示唆されたと考える。本プログラムが、大震災の前から、社会でしきりに叫ばれていた多様な立場の人々の「つながり」の構築や、「共生社会」の実現に向き合うことを目指している以上、大震災が起こった今だからこそ、プログラムを中断することは容易にできる決断ではなかった。しかし、プログラムが担うミッションに応えることも容易ではなく、現実的には、プログラムを最後までやり遂げることがどんどん難しくなっていた。しかし、そのような中でも、3人の参加者が「このような時だからこそ、報告会をやるべきだ」と強く希望し、報告会に向けて再始動することになった。彼らを選んだテーマは鋭い視点のものばかりだったが、それは大震災の混乱の中でも、その最中で起こっている「見えないもの」を冷静に見て、考察する力が備わっていたからだろう。また、前年度プログラム参加学生たちが「今こそ、このプログラムをやる意味があるし、自分たちも力になりたい」と、積極的に応援してくれたことも大きな力となった。こうして一時は開催が危ぶまれた報告会は2011年7月7日、横浜校舎にて開催することができた。当日の司会は、本プログラムの最初の報告会から協力していただいている、本学アナウンス研究会が引き受けてくれた。また、冒頭の挨拶では、本学副学長である、吉井淳先生が報告会にエールを添えてくださった。規模こそ小さく、学内向けの形式となったが、30人以上の学生が集まり、教員の参加もあり、皆熱心に耳を傾けてくれ、活発な質疑応答が繰り返された。それはある意味5年間、毎年参加学生たちと共に描いていた「理想的な」報告会の形だった。報告会ではまず、参加学生たちが製作したオープニングムービーが上映され、プログラムの概要が紹介された。その後続けて、例年通り一つの発表につき発表時間9分という限られた時間で、3つの個性豊かな発表が力強く行われた。最初の「share」とい

う発表では、プログラムと東日本震災の募金活動の経験から、ボランティア現場におけるコミュニケーションの成立と、本当に社会のために動けるボランティア集団となるためには、何が必要なのかを「伝える・感動する・行動する」という切り口から追求した。次の「日本人って誰のこと？」という発表では、日米の学生のボランティア意識の違いに着目し、日米の学生から得たインタビューやアンケート調査結果なども加えながら、「帰属意識・学生運動・ボランティア」というキーワードから考察した。最後の、「教える or 教わる？」という発表では、アメリジャンとホームレス、そして自分が今まで受けてきた教育という一見無関係な3者の相関を、「無視・無関心・無知」というキーワードから検討した。ピンと張りつめた緊張感が漂うなか、会場からは積極的に質問の手が挙がり、質疑の時間は大いに盛り上がった。以下、来場者アンケートの自由記載欄に書かれていた記述を紹介する¹⁾。

「ボランティアに触れたことがなく、今回の発表で、ボランティアに関心が持てました。質問にも全て真剣に答えていらっしやっただので、活動への熱心さが伝わりました。改めて自分の立ち位置を振り返ることが出来ました。」

「今回の報告会のために、自分たちの体験だけでなく、疑問に思っている事をちゃんと調べたりアンケートをとっていたりしてすごいと思いました。私自身、とても視野が狭かったと自覚しました。とても勉強になりました。」

「3人共がそれぞれの興味・関心に合わせて、考察していた姿が印象的でした。これからの3人の新たな movement に期待しています。」

「構成や主題への結びつけが上手で、聞きこんでいました。「教育」という着眼点が素晴らしく、とても感銘を受けました。教育の今後の形の展望についても話していたのがよかった。」

「発表②で、“日本人は、大きなことに目を向けがち”とおっしゃっていましたが、それは“いかに楽に目立つか”を重視する日本人が多いからかなと思いました。それぞれがしっかりとした意見を持っていて、素敵だなと思いました。」

「自分が今まで気付いていても、あまり考えていなかったことをたくさん考えた時間でした。」

「こうゆう大きなボランティア活動をしている人々を知らなかったので、自分にも良い刺激になりました。自分も小さくても何か人のために、出来る事をしていきたいと思います。」

自由記載欄の記述にもあったように、本報告会は3人の学生による、小さな movement でもあっただろう。それはとても小さいものではあったが、大震災によってもたらされた悲しみや葛藤、ジレンマを勇氣と希望へと変換する、大学生だからこそできるささやかなチャレンジでもあった。学生たちはプレゼンテーションを完成するために大いに悩み、何度も挫折しそうになりながらも、他者と共有可能なレベルまで高めることを諦めなかった。そのレベルに達するためには、自分にとっても他者にとっても主観

的な批判にとどまる限界を超えて、実践的で理論的なものを目指すことが求められた。限られた時間の中、それはとても難しく、彼らの発表は実際のところ、荒削りで未完成なものだったかもしれない。しかし「限られた時間の中で、不特定多数の他者へ伝える」という報告会での挑戦と、今後の出発点として、最低限の基礎的な能力を身に着けるといふ目的は達成することができたと考える。そして次の参加学生へ、大きなバトンをつないでくれた。こうして本プログラムは、9月から無事、「ボランティア特別研究 201」として装いも新たに授業としてスタートを切り、2月からは「ボランティア実習 201」として、アメリカでの海外ボランティア体験プログラムが実施される予定となっている。

本プログラムでお世話になっている主な3団体は、東日本大震災ではいち早く現地入りしたり、現在も具体的で現実的な支援活動を展開しながらも、並行して普段の活動も大切に続けている。そのような多忙な中でも、本プログラムは変わらぬご理解とご協力、激励を賜った。心から感謝申し上げます。

報告会后、残念ながら報告書まで書きあげた学生は1名だった。しかし、最後まであきらめなかった孤独な挑戦に心からエールを送ると同時に、彼女が報告書ⁱⁱで述べた言葉を抜粋して紹介することで、本報告を締めくくりたい。

「2011年2月に渡米してから1年が経った。初めてのアメリカという国での英語力不安、集団で生活していくこと、自分自身のボランティアに対する考えの甘さ…を実感し、初めての海外でのボランティアを経験して正直辛いことばかりだった。しかし、一緒にプログラムに参加した6人の仲間の支えもあり、アメリカでの滞在は自分自身を大きく成長させるものとなった。帰国直後、東日本大震災が起き思うようにプログラムが進行できなくなったものの、7月には報告会を開催することができた。報告会では、アメリカに行って感じたことや経験したことを日本の教育と関連付けて発表した。また、他の参加学生がどのような視点でプログラムに参加したかを知ることができた。そして今、報告書が完成した。結局、参加学生のうち、報告書を書き終えたのは、私だけであったことに自分自身とても驚いている。実際、報告書を書くことは面倒くさかったし、私の人生経験の1つとして「アメリカに行ってボランティアをした」という形で残しても良いと何度も思った。しかし、もし報告書を提出しなかったら、このプログラムで関わった人たちと縁が切れてしまうのではないかという不安と、もしここで終わらせてしまったら、このプログラムに参加したと胸をはって言えない気がした。そんな気持ちと戦いながら、今回報告書を完成させることができた。そして報告書を書き終えて、私はこのプログラムをやっと本当に終えることができたのだ。最後の最後まで辛くてどうしようもなかったけれど、自分の意見を主張できるチャンスをきちんと活かすことができた。報告書まで書きあげた終えた学生が1名しかないことはとても悲しいけれど、自分がやり遂げたことに誇りをもちたい。」 (李)

ⁱ 詳しくは「2010年度日米NPOボランティア体験学習プログラム報告書」を参照。

ⁱⁱ 詳しくは「2010年度日米NPOボランティア体験学習プログラム報告書」を参照。

命をつなぐ緑の回廊～パールの森プロジェクト ボルネオ・スタディツアー 2011

明治学院大学ボランティアセンターは、2008年7月より、NPO法人BCT ジャパンと学生チームMG パールとの3者協働プロジェクトとして、「パールの森プロジェクト」を展開してきた。具体的には、近年アブラヤシの大規模プランテーション開発によって急速な森林伐採が進み、棲み処を追われた多くの野生動物たちが絶滅の危機に瀕している、東南アジアボルネオ島の現状を改善すべく、学生が作るボルネオ産淡水パールを使用したアクセサリーの売上を、分断された森を繋ぐ土地の購入費用として寄付をする「緑の回廊プロジェクト」へ参加している。本プロジェクト（以下PJ）の主旨は、ボルネオと自分たちの便利で豊かな生活の「見えにくい」相関を知り、自分にできることを考え、行動していくことにある。したがって本PJは「ボルネオへの恩返し」という価値観を3者で共有しており、学生の活動はアクセサリーの販売だけではなく、これを手段としてどのように社会との連帯を広めていけるかに主眼を置いている。PJの地道な蓄積と、現地を自分で確かめたいという学生の想いから昨年度、ボランティアセンター主催事業として本ツアーが実現した。初回ということで様々な課題もあったが、関係団体の皆様のご協力のもと、無事、成功裏に終了し、次年度の催行が決定し、今回2回目の実施となった。ツアー内容は昨年度同様で（詳しくは2010年度報告書を参照）、催行時期は2011年9月9日～18日、そしてBCT ジャパン理事長坪内俊憲氏が多忙の最中、今回も同行して下さることになった。また、事前学習などの事前準備は、MG パールの学生たちの協力を得ることになった。そして7名の学生たちの参加が決まった。ところが突然、引率者をつけないことになり、参加者及びBCT ジャパンを始めとする関係団体の皆様には多大なご迷惑をかけることになった。改めてお詫び申し上げたい。しかし、たくさんの方々のお力添えにより、今年度も無事ツアーを催行することができた。心から感謝申し上げます。今回は、東日本大震災が起こった時だったからこそ、本ツアーを催行する意義も大きかっただろう。震災がもたらした惨事に原発事故があるが、事故が私たちの便利で豊かな生活を支えている「見えにくい」現実が、大震災によって露わになった人災であることは、未来への警鐘であり、ボルネオ島の現状と私たちの生活の相関と向き合うという本ツアーの主旨とも通底しているだろう。震災直後の混乱の最中、この視点を真っ先に述べたのは学生たちであった。そして学生から学生へその想いは引き継がれ、彼らはボルネオへ渡った。今回は、出発前にボルネオ島について調べて発表する勉強会を開催したり、各種文献を読んだり、関連する映画やDVDを視聴して事前学習を行った。また現地での役割分担や、ミーティングなどの生活ルールについても取り決め、BCT ジャパンの開催するイベントやMG パールの活動にも参加した。現地NGOとのアクセサリーワークショップは、昨年は細かな作業で四苦八苦し、女性向けの物しか作れなかったが、今年は白金在住の造形アーティストや、MG パールが支援を受けている国際ソロプチミストのメンバーであるジュエリーデザイナーによる手ほどきがあり、容易にコサージュや男性向けブレスレットが作れ、大変盛況だった。また、帰国後の報告会は白金（12月14日）、横浜（11月30日）の両校地で実施できた。残念ながら学生の参加が少なかったが、発表、展示、土地分断ゲーム等の多彩な内容

は、学外の来場者から好評を博し、様々なお声掛けをいただき、今後の MG パールの活動にも貢献する結果となった。2012年1月現在、参加学生たちは昨年度に続き、HPの製作に取り掛かっている。今回、様々な困難があったが、結果的に前年度の課題であった事前学習や準備を充実させ、昨年度よりも情報の発信と共有の幅を広げることができた。それは、確実に成長している学生たちの力と、彼らに惜しみない理解と協力の手を差し伸べてくださった、諸団体・個人の皆様によって成し得たものであつたらう。今年度の成果のバトンを、来年度のツアーに向けて繋げていくことが、今後の課題である。以下、残りの紙幅では、報告会で発表した参加学生たちの声を紹介したい。(李)

<自然と人の共生>

私はスタディツアーに行く前までは、食品の成分表示のラベルは、カロリー欄くらいしか見ていませんでした。しかし、実際にボルネオに行き、自然に触れ、プランテーションや搾油工場を見たことで、帰国後の行動は変わったと実感しています。ささいな事ではありますが、食品の成分表示を見て、植物油と書かれていたら、ありがたくいただくことを心がけたり、就活では、その企業が環境に配慮しているかどうかを確認するようになりました。私たちが生きていく中で、パームオイルはどうしても必要なものだと思います。しかし、闇雲に森林を伐採することは間違っています。現地の方で「プランテーションはこの国が発展している証拠だ」とおっしゃる方もいますが、人と動植物が共存していくには、もっとプランテーションと森林のバランスについて考えるべきではないかと思いました。また、このスタディツアーに参加を決める前は、正直費用高いなーと思っていたのですが、結果的に、新しい知識を得ることで視野が広がり、かけた費用以上のものを得ることができました。ボルネオに行って良かったと心から思います。(社会学部社会学科3年 中田紗有実)

<豊かな生活の裏には…>

私は、ボルネオスタディツアーに行くことによって、様々な考えを身につけることができたと思います。帰って来てからは、日本で、普通に暮らして居ても、以前では、考えた事がないような事が思い浮かんで来ます。食品、化粧品、日用品に大量に使われ、問題になっているパームオイルもそうですが、教室に置いてある机、椅子や筆箱の中の鉛筆とかに使われている木材も、もしかしたらボルネオの木を切って作られたモノなのかと思う事が有ります。こうして、考えてみると私たちの身の回りのモノは殆ど、他国から輸入されていたり、加工をされています。生活をしてゆく上では、最低限、しょうがない部分は有るかもしれませんが、しかし、「豊かな生活の裏には沢山の犠牲が伴っている」という考えが前提に有れば、今までと違った消費の仕方になると思いました。こうした、私たち人間と自然との関係について身をもって考える事が出来るボルネオスタディツアーに、参加する事が出来て良かったと思います。

(経済学部経済学科3年 堅田勝昭)

<森は生きている>

私が一番感動したのは、ボートで出ると直ぐに出会うことの出来る野生動物と緻密な生態系です。日本では森に出かけて行ったとしてもあんなに多くの動物と出会うことはありません。また、コウテイゼミというセミの鳴き声をきっかけに森の音が鳥から虫に変わりますが、そのコウテイゼミが鳴き始めるのは毎日六時きっかりです。一見気ままに感じる野生の世界にも細かいいきまりや感覚があるということに大変驚きました。一方で親を亡くし心の病に苦しむボルネオゾウの子どもヤビに触れ、日本で大量に消費されているパーム油のもたらす影響の末端を知ったこともこのスタディツアーで学んだ大きな事柄です。虫も動物も森も私たちと同じように生きているんだ、と実感することが出来ました。

日本に帰国し、高速道路を走るバスの中、コンクリートに囲まれながらボルネオの森を思い出して泣いてしまったことをつい昨日のこのように感じます。スタディツアーは私にとって、本当に大きく、大切な経験になりました。

(社会学部社会学科3年 藤井花織)

<共存してゆくために>

私達人間が生きて行くためには、多くの支えが必要です。しかし、私達の豊かな生活のために、長い時間をかけて生きてきた森を伐採し、そこに住んでいた動物たちを追い出しても良いのでしょうか。実際にボルネオ島に行ってみると、道路の脇には必ずと言っていい程のアブラヤシが栽培されており、地平線の向こうまでその光景が広がっている様子を見てショックを受けました。これらのアブラヤシの栽培のために多くの木が伐採され、それによってオランウータンなどの生き物の生活が奪われている現実を実感しました。私達は、自分の豊かな生活のために彼らの生活を奪っている現実をあまり知りません。知ろうと思わなかったのかもしれませんが。今回のスタディツアーでは、普段気にしていなかった普段の生活の豊かさに気づき、森と人と動物とが共存してゆくためにはどうすればよいか考えることが出来る良い機会になりました。

(社会学部社会福祉学科2年 鈴木茉衣子)

<追い求めすぎてはいけない人間にとっての利益>

ボルネオでは毎日感動と驚きの連続でした。日本では味わうことのできない貴重な体験を通して、様々なことを考えさせられました。私が一番感じたことは、人間にとっての利益を追い求めすぎてはいけないということです。森林伐採の際に保護されたゾウの姿を見た時はショックを受けました。皮膚も表情も弱々しく、食べ物をうまく飲み込めない状態でした。経済が発展して国が豊かになっていくことは確かに大切なことですが、森を壊し、動物を犠牲にしてまで、プランテーションの開発を進めていくのは良くないことだと思います。少し立ち止まって、環境や動物のことをもう一度考えていく必要があると感じました。パーム油は私たちにとって身近な存在です。だからこそ、当たり前のように消費していくのではなく、少し意識して生活していくことが大切なのではないかと思います。ボルネオで見えてきた

こと、感じたことをこれからもずっと大切にしていきたいです。

(社会学部社会福祉学科2年 小川知恵)

<他人事ではなく、全ては自分事>

この旅で、私が何より気持ちよく感じたのは、“音”が日本と全く異なることです。朝は早くから様々な鳥が鳴き始め、昼は無数の虫が声の大きさを競い合い、日が暮れると両生類と爬虫類が暗闇の世界を支配します。全ての生き物がそれぞれ必死に生き、全ての生き物がお互い支え合っていました。彼らのつながりとバランスを保ち続けているのが、熱帯雨林です。私たちは、森とそこに住む生き物たちの何億年にもわたる古代からのつながりを、たった数十年で断ち切らんとしています。今回、熱帯雨林に初めて足を踏み入れてみて、そこはやはり人間が手を加えて良い場所ではないと直感的に感じました。「神聖」という言葉が相応しいです。この大自然を壊すことは、人道に反するというより、生物道に反することであると、私は思います。オランウータンになってみてください。自分たちの住む町が、心無い何者かにも簡単に壊されてゆくのです。そして、私たちはそれを黙って見ていることしかできないのです。逃げる場所もなく、その何者かに見つかれば殺されてしまうのです。他人事ではありません。同じ生き物として、もっと優しい心と真実を見る目を持って、自分のライフスタイルを新たに見直していきたいと思いました。

(国際学部国際学科2年 岩佐杏実)

<マレーシアの再発見>

マレーシア出身でありながら、今まで半島のところしか見てなかったのが、今回は、ボルネオ島の熱帯雨林とはどんな場所かを、体で覚えることができました。私が今まで住んでいるマレー半島と違って生物多様性のジャングルには想像を超える生き物が生息しています。野生のゾウやイノシシ、そして絶滅寸前のオランウータンなど、多くのほ乳類の気配を感じ、テナガザルの叫びやサイチョウの羽音、セミやカエルなどのリズムカルな合唱も聴きました。とても貴重な経験でした。

スタディツアーでパームオイルの工場を見学させていただきました。一番印象的だったのはその工場の社長さんの言葉でした。「スーパーの3分の2の商品の中に、うちの製品（パームオイル）が入っています。しかもあなたはマレーシア人でもあるから、自分の国の経済は我々のアブラヤシの商品によって成長しているのはわかっているはず。だから、もっとうちらの商品を応援すべきだ」と言われました。確かに社長さんの言った通り、母国の経済を支えているのは変えられない事実であります。ただ現実には野生動物だけでなく、そこに住んでいる住民への影響が顕発し、人間の将来生活にも大きな影響を与えること（温暖化等）がほぼ確実となっていることを考えられます。だから、せめてもできる事といえば、この経験をより多くの人に伝える事だと思いました。

(国際学部国際学科3年 庄克強)

ソニーマーケティング学生ボランティアファンドについて

このファンドは、大学生の社会参加への第一歩となり、また、社会をより良くしていこうとするリーダーシップの芽生えとなるようなボランティア活動を支援することを目的とし、ソニーマーケティング株式会社の提案により、日本初の全国の大学生ボランティアを対象とするファンドとして2001年から始まった。当初より本学ボランティアセンターが事務局を担当させていただいている。発足から10年を経過し、当ファンドも軌道に乗り、関係各所からの高い評価を得ている。(ソニーマーケティング学生ボランティアファンドのHP <http://www.sony.jp/CorporateCruise/Volunteer/index.html>)

今回は第11回目の募集となり、前回に引き続きAコース(助成金25万円を上限)およびBコース(助成金10万円を上限。こちらのコースは、新たにボランティア活動を始めようというグループや比較的費用のかからない活動規模の小さなグループにも助成をしようという考えのもと設けられている)を設定し、2011年10月13日～11月15日に募集を行った。審査では、前年同様「学生ならではの企画であるか」「企画が自己満足に終わっていないか、プログラムに社会性はあるか」「活動のユニークさ、チャレンジ性」「企画内容に計画性はあるか」「これまでにないような新規性はあるか」「ファンドが有効に生かされるか」の6つを評価基準とし、応募総数72団体の中から、予備審査、本審査を経て、Aコース17団体、Bコース6団体、合計23団体が助成対象として決定された。大学別には、国立大学13大学、公立大学6大学、私立大学33大学の合計52大学からの応募となった。分野別の応募状況としては、例年トップであった国際支援に代わり東日本大震災が一番多かった。行政の手が及ばないところへの支援に目を向けたテーマが目立った。次いで障がい者支援、教育の順であった。環境をテーマとした企画が盛り返してきたという印象も受けた。活動地域としては国内60件、海外12件であり、海外の大半が東南アジアとなり、カンボジア、フィリピン、マレーシアなどが多くなっている。また、助成団体の内訳としては、活動を継続している団体が23件中20件と多く、腰を据えた活動が支持されたことが今年の特徴としてあげられる。

助成を受けた団体はそれぞれ活動を行い、2012年7月には活動報告会が予定されている。報告会には助成団体の学生が全国から一堂に会し、いくつかの団体による活動報告や全体懇親会のほか、当日は各団体の活動をまとめた報告書も配布する予定である。

なお、第10回については東日本大震災発生による被災地の状況を鑑み、活動報告会開催の予算を被災地支援に回すこととした。そのため、助成を受けた団体による活動報告会については中止とし、開催時に配布していた報告書は郵送した。報告書を読み、他団体の活動に興味を持った団体相互が連絡を取れるように、希望する団体のみメーリングリストを作成した。

(波多野)

NGO アカデミー「グローバル化の中の国際協力」

ボランティアセンターでは、昨年度から NGO アカデミー連続講座「グローバル化の中の国際協力」をスタートさせ、NGO だけでなく国連、企業経営者を含む社会貢献意識の強い著名人をお招きし、講演をしていただいている。ボランティア精神はボランティア活動に限定されるものではない。講師のお話を聞いていると、改めて、そういう印象を受ける。毎回、多くの学生、社会人が来場している。

これまでのラインアップは以下の通り。(敬称略)

- ① 「NGO の新たな役割」 山本理夏 (ピースウィンズ・ジャパン事業担当責任者)
- ② 「NGO と企業の協力—その意義と課題」 富野岳士 (JANIC 事務局次長)
- ③ 「NGO と BOP ビジネス」 黒田かをり (CSO ネットワーク共同責任者)
- ④ 「BOP ビジネスと開発—国連の新たな挑戦」 西郡俊哉 (UNDP 東京事務所)
- ⑤ 「世界を救え! 日本の企業が挑戦 BOP ビジネス」 小田兼利 (日本ポリグル会長)
- ⑥ 「東日本大震災被災者支援報告」 ジャパン・プラットフォーム
- ⑦ 「東日本大震災、ユニセフの支援」 福原美穂 (ユニセフ東京事務所コーディネーター)

この中から、特に盛況だった、2011 年 7 月 21 日、150 人が詰めかけた第 6 回「ジャパン・プラットフォームによる東日本大震災被災者支援報告シンポジウム」の様相を紹介する。



NGO 30 団体と外務省、経済界で組織するジャパン・プラットフォーム (JPF) は、海外での人道支援での豊富な経験を生かし、高いロジスティック能力と機動力で、震災直後から被災者に必要な物、サービスをいち早く届けたことで高い評価を受けている。冒頭、椎名規之 JPF 事業部長が 3

月 11 日の地震発生から 2 時間 46 分の午後 5 時 32 分には JPF としての支援開始を決定した」と緊急対応を強調。これまでに 64 億 4000 万円余の寄付が寄せられ、教育支援、医療・公衆衛生支援、地域復興支援、食料・物資支援に取り組んできたが、今回の特徴として企業支援の迅速性をあげ、「支援開始を決めた十数分後にはソフトバンクモバイルから携帯電話の無償貸し出しの申し出があり、間もなく、三井物産が 1000 万円の寄付を決めた」と紹介した。

ADRA が自治体職員や他県からの応援職員に対し炊き出しを行った「ADRA 食堂」を、NICCO は海外でのマラリア対策の経験を生かした防疫・防虫対策を報告した。積極的な活動の一方で、とまどいも多く、JPF の明城徹也東北事務所長は「現地入りし、NGO だと名乗ったら個人のボランティアと同じ扱いを受けた。NGO が専門的な知識と経験を持った団体であることを理解してもらうのに時間がかかった」とのエピソードを披露した。

(原田)